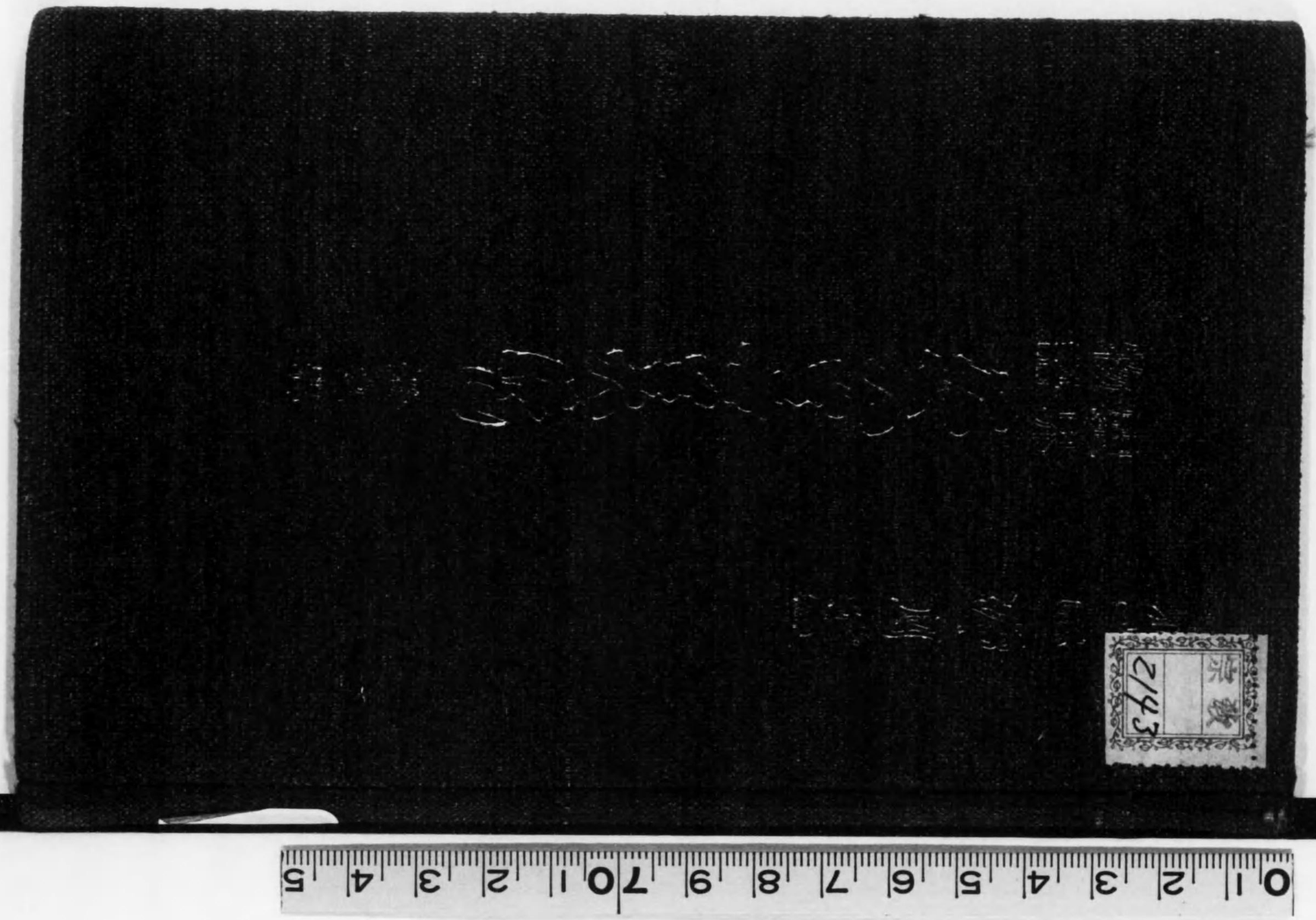
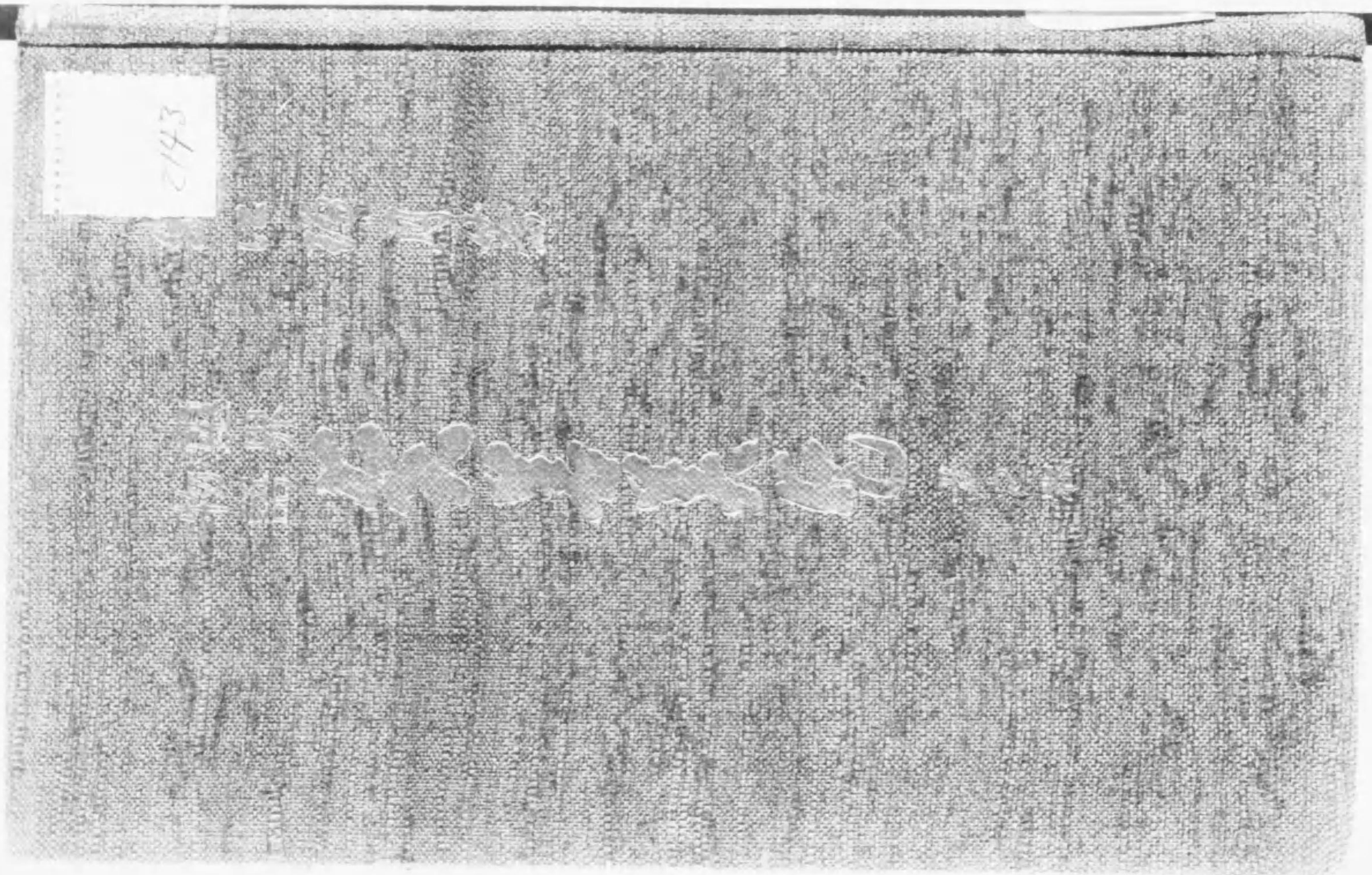


部



606

647

省務内
9.9.26
(版出通普)

宗教
第 2143.
永久保存

特1-01
248

出口瑞月口述

眞善美愛

丑之卷

〔霊界物語第五十巻〕

天聲社發行

國會圖書館
51.12.16
1094679

蒙古に於ける出口聖師

序文

顧みれば大正十年十月十八日、松雲閣に於て靈界物語と題し口述筆記を始めしより、十六ケ月目漸く五十卷を編纂せり。此間種々の故障のため着手日數は二百日内外の口述にて本卷に到達せり。而して本日は大正十二年一月二十三日、此數字を合算すれば三十六となり、みろくに因む。又舊暦にては大正十一年十二月七日、此數字を合算すれば三十となり、三ツの御魂に因みたる吉日なり、又以て一奇と謂ふべし。靈界物語第一卷より第十二卷迄を第一輯とし改めて（靈主体從）と題し、第十三卷より第廿四卷迄を（如意寶珠）と題し、第廿五卷より第卅六卷迄を第三輯とし（海洋萬里）と題し、第卅七卷より第四十八卷迄を第四輯とし（舍身活躍）と題し、第五輯に當る（眞善美愛）と題せる物語を漸く茲に第二卷迄口述編纂を了りたり。何れ

も一題目毎に三百六十頁十二册、計四千三百二十頁と相成る次第なり。ア、瑞月は精神上及び肉体上の大なる束縛を受けたる身ながらも、大神の恩寵と筆錄者諸弟の熱烈なる努力とによつて、茲に五十卷の大峠を越えたるは實に人間事とはごうしても思はれないのであります。希はくば大本の信者はいふも更なり、大方具眼の士はこの熱血より迸り出でたる作物を愛讀あつて、宇宙の大精神を了知し、人として世に處すべき指針となし給はむことを。　謹言

大正十二年一月廿三日　舊大正十一年十二月七日

於伊豆湯ケ島假教主館　瑞　月　識

眞善美愛【丑の卷】(50)

目次

序文……頁
總説……一

第一篇　和光同塵

第一章　至善至惡……三
第二章　照魔燈……一七
第三章　高魔腹……三四
第四章　御意犬……四九

第二篇　兒黨擡頭

第五章　靈肉問答……六三
第六章　玉　茸……八一
第七章　負傷々々……九六
第八章　常　世　闇……一一九
第九章　眞理方便……一三六

第三篇　神意と人情

第一〇章　据置貯金……一五三
第一一章　鸚　鵡　返……一六九
第一二章　敵愾心……一八五

第一三章　盲　嫌……二〇一
第一四章　虬の盃……二一八

第四篇　神犬の言靈

第一五章　妖　幻　坊……二三三
第一六章　鷹　鷲　摑……二五三
第一七章　僞　筆……二七二
第一八章　安　國　使……二八八
第一九章　逆　語……三〇五
第二〇章　惡　魔　拂……三二一
第二一章　犬　嘩……三三六

眞善美愛（丑の巻）目次終

眞善美愛【丑の巻】〔50〕

口述者　出口瑞月

筆錄者　松村眞澄
北村隆光
加藤明子

總說

本巻は祠の森の聖場に妖幻坊なる妖怪現はれ來り、三五教の杢助時置師神と名乗り、戀と慾ごに餘念なき高姫の義理天上自稱日出神の生宮が、兩々相對して聖場を占有し、館主珍彦その他の眞人を排除し、且大神の大神業を破壞せむと、獅子奮迅の暴逆的活動を開始し、初稚姫の

愛善の德と信眞の光に照らされ、又猛犬スマートに脅嚇され聖場を遁走し、河鹿峠の谷道にてイク、サールの追手に會し、妖幻坊、高姫對イク、サールの活劇の眞最中、又もやスマートが猛虎の勢にて現はれ來り、イクとサールの危難を救ひ、敵は自ら躓いて途上に顚倒し、悲鳴を擧ぐる場面まで口述してあります。愛善の德と信眞の光に充されたる天國の天人界に籍を有したる初稚姫と、狂妄熱烈なる高姫と、肉体的精靈妖幻坊との三巴となつての活躍は、憑靈現象の如何なるものなるかを知るに最も便利なるものと信じます。讀者意を潛めて充分御研究あらむことを希望致します。口述者の瑞月も、また或る精靈の神格を充されたるもゝの媒介的活動によつて、この大部の書籍を編する事を得たのであります。今後益々御神助を以て完結の域に達せむことを天地の神明に願求する次第であります。

大正十二年一月廿三日　舊十一年十二月七日　於豆州湯ケ島湯本館　瑞　月　識

第一篇　和光同塵

第一章　至善至悪（一二九五）

本巻物語の主人公たる初稚姫及び高姫の霊魂上の位置及び其情態を略叙して参考に供することゝする。

初稚姫は清浄無垢の若き妙齢の娘である。而して別に現代の如く學校教育を受けたのではない。只幼少より母を失ひ、父と共に各地の霊山霊場に参拝し、或は神霊に感じて三五教の宣傳使と共に種々雑多の神的苦行を經たるため、純粋無垢なる霊魂の光は益々其光輝を増し、玲瓏玉の如く、黒鐵時代に生れながら、其本体即ち内分的生涯は、黄金時代の天的天人と向上して居た。故に宣傳使としても又地上の天人としても、實に優秀な神格者であつた。大神の神善と神眞とを能く体得し、無限の力を與へられ、神の直接内流を其精霊及び肉身に充せ、其容貌並

に皮膚の光澤、柔軟さなどは殆どエンゼルの如くであつた。故に初稚姫は大神の許しある時は一聲天地を震撼し、一音風雨雷霆を叱咤し、地震雷海嘯その外風水火の災をも自由に鎮定し得る神力を備へてゐた。されど初稚姫は愛善の德全く身に備はり、謙讓なるを以て處世上の第一となしゐたれば、容易に神力を現はす事を好まなかつた。而して姫の精靈は大神の直接神格の内流に充され、靈肉共に一見して凡人ならざるを悟り得らるゝのであつた。姫は能く天人と語り、或は大神の御聲を聞き、眞の善よりする智慧証覺を具備したる點は、三五教きつての出籃のほまれを恣にしてゐた。それ故八岐大蛇の跋扈する月の御國へ神軍として出征するにも、只一人の從者もつれず、眞に神を親とし主人となし師匠となし、愛善の德と信眞の德を杖となし或は糧となし、天上天下に恐るゝものなく、猛獸毒蛇の荒れ狂ふ深山幽谷曠野をも、天國の花園を過ぐるが如き心地し、目に觸るゝもの、身に接近するもの、悉く之を親しき友となし

且此等の同士となつて和合歸順悅服等の神力を發揮しつゝ進むことを得たのである。故に如何なる現界的智者學者に會ひて談話を交ふる時も、一度として相手方に嫌惡の情を起さしめたる事なく、其說く所は何れも靈的神的にして、愛と信とに充されざるはなく、草野を風の行過ぎるが如く風靡し、歸順し、和合せしめねばおかなかつた。天稟の美貌と智慧証覺は何れも愛善の德と眞善の光なる大神より來るが故に、姫が面前に來る者は何れも歡喜悅服せざるはなかつたのである。且又理性的にして物に偏せず、中庸、中和、大中なるの眞理を超越してゐた。

抑も此理性は神愛と神眞の和合より來る所の圓滿なる情動によつて獲得し、此情動よりして眞理に透徹するものである。さて眞理には三つの階級がある。而して人間は此三階級の眞理にをらなければ、到底神人合一の境に入る事は不可能である。法律、政治の大本を過たず能く現界に處し、最善を盡し得るを稱して、低級の眞理に居るものと言ひ、又君臣夫婦父子兄弟朋友

並に社會に對し、五倫五常の完全なる實を擧げ得る時は、これを中程の眞理に居る者といふのである。併しながら如何に法律を解し政治を說き、或は五倫五常を詳細に說示し了得すること雖も、之を實踐躬行し得ざる者は所謂僞善者にして、無智の賤人にも劣るものと靈界に於て定めらるゝのである。又愛の善と信の眞に居り、大神の直接內流を受け、神と和合し、外的觀念を去り、萬事內的に住し得るものを稱して最高の眞理に居る者と云ふのである。故に現代に於て聖人君子と稱へられ或は智者識者と稱せられ、高位高官と崇めらるゝ人物と雖も、最高の眞理に居らざる者は、靈界に於ては實に賤しく醜く、且中有界又は地獄界に群居せざるを得ざる者である。靈界に行つて現界に時めく智者學者又は有力者といはるゝ者の精靈に出會し、其情況を見れば、何れも魯鈍痴呆の相を現はし、身体の動作全く不正にして四肢戰き慄ひ、少しの風にも吹き散りさうになつてゐるものである。是凡てが理性的ならざるが故である。現代の人間が理性的とか理智的とか、物知り顏に云つてゐる其言說や又は博士學士等の著書を見るも、一つとして理性的なるものはない。何れも自然界を基礎とせる不完全なる先賢先哲と言はれたる學者の所說や敎義を基礎とし、古今東西の書籍をあさり、之を記憶に存し、其記憶を基として種々の自然的知識を發育せしめたるものである。故に只記憶のみにして、決して理性的知識ではない。現代の總ての學者は主神大神の直接又は間接の內流を受入るゝ事能はず、何れも地獄界より來る自愛及び世間愛に基く詐りの知識によつて薰陶されたるものなれば、彼等は靈体分離の關門を經て精靈界に至る時は、生前に於る虛僞的知識や學問の記憶は全部剝奪され、殘るは只恐怖と悲哀と暗黑とのみである。凡て自愛より出づる學識智能は何れも暗黑面に向つてゐるが故に、神のまします天界の光明に日に夜に遠ざかりゐたれば、精靈界に入りし時は靈的及び神的生涯の準備一もなく、否却つて魯鈍無智の人間に劣ること數等である。魯鈍無智なる者は

常に朧氣ながらも靈界を信じ且恐るゝが故に、驕慢の心なく、心中常に從順の德に居りしが故に、靈界に入りし後は神の光明に浴し、神の愛を受くるものである。

又現界に在りては、到底人間の其眞相は分らないものである。されど初稚姫の如く肉体其儘にて天人の列に加はりたる神人は、よく其人の面貌及び言語動作に一度觸るれば、其生涯を知り、其人格の如何をも洞破し得るのである。如何に現代人が法律をよく守り、或は大政治家と賞められ、智者仁者と云はるゝ事あるとも、肉体の表衣に包まれ居るを以て、暗冥なる人間はこれが眞相を悟り得ることは出來ない。肉体人は其交際に際し、心に思はざる所を言ふことあり、或は思はざる所、欲せざる所を爲さねばならぬことがある。怒るべき時に怒らず、或は少く々無理なことでも、何とかして表面を裝ひ、世人をして却つて之を聖者仁者と思はしめてゐる事が多い。又肉体人は如何なる僞善者も虚飾も判別するの力なければ、賢者と看做し、聖人と看做して、大いに賞揚することは澤山な例がある。故に瑞の御靈の神諭にも……人の見て善となす所、必ずしも善ならず、人の見て惡となす所、必ずしも惡ならず、善人と云ひ惡人と云ふも、只頑迷無智なる盲目世間の目に映じたる幻像に外ならない……と示してあるのは此理由である。瑞月菅つて高熊山に修業の折、神の許しを受けて靈界を見聞したる時、わが記憶に殘れる古人又は現代に肉体を有せる英雄豪傑、智者賢者といはるゝ人々の精靈に會ひ、其狀態を見聞して意外の感に打たれたことが屢々あつた。彼等の總ては自愛と世間愛に在世中惑溺し、自尊心强く且神の存在を認めざりし者のみなれば、靈界に在りては實に弱き者、貧しき者、賤しき者として遇せられつゝあつたのである。之を思へば現代に於ける政治家又は智者學者などの身の上を思ふにつけ、實に憐愍の情に堪へない思ひがするのである。如何にもして大神の愛善の德と信眞の光に、彼等迷へる憐れな地獄の住人を、せめて精靈界にまで救ひ上げ、無限の永

苦を免れしめむと焦慮すれども、彼等の靈性は其内分に於て神に向つて閉され、脚底の地獄に向つて開かれあれば、之を光明に導くは容易の業でない。又如何なる神人の愛と智に充てる大聲叱呼の福音も、靈的盲目者、聾者となり果てたるを以て、如何なる雷鳴の轟きも警鐘亂打の響も、恬として皷膜に感じないのである。吁憐れむべき哉、虚偽と罪悪に充てる地獄道の蒼生よ。こゝに初稚姫の神靈は再び大神の意思を奉戴し、地上に降臨し、大豫言者となつて綏の聖地に現はれ、其純朴無垢なる記憶と想念を通じて、天來の福音を或は筆に或は口に傳達し、地上の地獄を化して五六七の天國に順化せしめむと計らせ給ふこと、殆んど三十年に及んだ。されど頑迷不靈の有苗的人間は之を恐れ忌むこと甚だしく、恰も仇敵の如くに嫉視し、憎悪するに至つたのである。あゝ斯くも尊き大神の遣はし給ふ聖靈又は豫言者の言を無視し、輕侮し、益々虚偽罪悪を改めざるに於ては、百の天人は大神の命を奉じ、如何なる快擧に出で給ふやも計り難いのである。

次に高姫の靈界上の地位に就いて少しく述ぶる必要がある。宇宙には天界、精靈界、地獄界の三界あることは屢々述べた所である。而して精靈界は靈界現界の又中間に介在せりと云つてもいゝ位なものである。故に精靈界には自然的卽ち肉体的精靈なるものが團体を作つて、現界人を邪道に導かむとするものある事を知らねばならぬ。肉体的精靈とは、色々の種類あれども其形は人間に似て人間にあらざるあり、或は天狗あり、狐狸あり、大蛇あり、一種の妖魅あり て、暗黑なる現界に跋扈跳梁しつゝあり。此等は地獄界にもあらず、一種の妖魅界又は兇黨界と稱し、人間に警ふれば、所謂不浪の徒である。彼等は人間の山窩の群の如く、山の入口や川の堤や池の畔、墓場の附近等に群居し、暗冥にして頑固なる妄想家の虚を窺ひ、其人間が抱持せる慾望に附け入つて虚隙を索めて入り來るものである。此肉体的精靈も亦人間の想念と和合

せずして其体中に侵入し來り、其諸感官を占有し、其口舌を用ひて語り、其手足を以て動作するものである。而して此等の精靈は其憑依せる人間の物を以てすべて吾物ごのみ思うてゐる。或時は人間の記憶ご想念に入つて大神ご自稱し、或は豫言者をまね、遂に自ら眞の豫言者ご信ずるに至るものである。されご此等の精靈は少しも先見の明なく、一息先の事は探知し得ないものである。何故なれば其心性は無明暗黑の境域に居るが故である。憑依された人間が、例へば開祖の神諭を讀み耽り、之を記憶に止め想念中に蓄へおく時は、侵入し來りし惡靈即ち妖魅は、之を基礎ごして種々の豫言的言辭を弄し、且又筆先なごご稱して、似たり八合なごごを書き示し、頑迷無智なる世人を籠絡し、遂に邪道に引き入れむごするものである。開祖の神諭に……先の見えぬ神は誠の神でないぞよ……ご示されたるは此間の消息を洩らされたものである。又熱狂なる人間は吾記憶を基礎ごして、其想念を働かせて入り來りし精靈の吾記憶に反けるこごを口走り、或は書き示す時は、忽ち審神的態度ごなり……汝は大神の眞似を致す邪神にはあらざるか、サ早く吾肉体を去れ……なごご反抗的態度に出づるものもある。併し乍ら遂には其惡靈の爲に說伏せられ、或はいろ〳〵の肉体上に苦痛を與へられ、遂にその妖魅の言に感服するに至るものである。サア斯うなつた時は、最早上げも下しも出來なくなつて、如何なる神の光明も說示も承認するの力なく、只單に……われは天下唯一の豫言者なり、無上の神人なり、吾なくば此蒼生は如何せむ……ご狂的態度に出づるものである。此物語の主人公たる高姫は卽ち此好適例である。故に彼れ高姫は自己の記憶ご想念ご、憑靈の言葉の外には一切を否定し、且熱狂的に數多の人間を吾說に悅服せしめむご焦慮するのである。其熱誠は火の如く暴風の如く又洪水の如し。如何なる神人も有德者も之を說得し歸順せしめ、善靈に歸正せしむるこごは天下の難事である。故に高姫は一旦改心の境に入りし如く見えたれごも、再びつきまごへ

る兇靈は彼が肉体の虛隙を見すまし、又もや潮の如く体内に侵入し來り、大狂態を演ずるに至つたのである。

斯かる狂的憑靈者の辯舌と行爲は最も執拗にして、晝夜間斷なくつき纏ひ、吾所說に歸服せしめねば止まない底の勇猛心を抱持してゐる。かゝる兇靈の憑依せる僞豫言者に魅入られたる人間は、如何なる善人と雖も、稍常識ありと稱へられてゐる紳士でも、又奸智に長けたる人間でも、思索力を相當に有する人物でも、遂には其術中に卷込まれて了ふものである。かゝる例は三十五萬年前の神代のみではない、現に大本の中に於ても斯かる標本が示されてある。これも大本の神示に依れば、神の御心にして、善と惡との立別けを示し、信仰の試金石と現はし給ふものたることを感謝せなくてはならぬ。一旦迷はされたる精靈や人間は、容易に目の醒めるものでない。併しながら斯の如き渦中に陷る人間は、靈相應の理によつて、已むを得ずこゝに沒入するのである。されで神は飽くまでも至仁至愛にましますが故に、彌勒胎藏の神鍵を以て寶庫を開き、天國の光明なる智慧証覺を授け、愛善の德に包んで、之をせめて中有界までなりと救ひ上げ、こゝに靈的教育を施し、一人にても多く天國の生涯を送らしめむとなし給ひ、仁愛に富める聖靈を充して、豫言者に來り、口舌を以て天國の福音を宣り傳へ給ふことゝなつたのである。吁されど頑迷不靈の妖怪、人獸合一の境域に墜落せる精靈及び人間は、天國に救ふことも恰も針の穴へ駱駝を通すよりも難きを熟々感ずる次第である。大本の神諭にも……神と人民とに氣をつけるぞよ……とあるは卽ち精靈と肉体人とに對してのお言葉である。吁如何にせむ、迷へる精靈よ、人間よ、殊に肉体的兇靈に其身魂を占領されたる妖怪的僞豫言者の身魂をや。

序に祠の森に於て杢助と現はれたる妖怪は、兇惡なる自然的精靈卽ち形体的兇靈にして高姫

の心性に相似し、接近し易き便宜ありしを以て、互に相慕ひ相求め、風車の如く、廻り燈籠の如く、終生逐ひまはりなごして狂態を演出し、現界は云ふに及ばず靈界の悪魔となりて神業の妨害をなし、遂には神律に照され、神怒に觸れ、根底の國の最底に投下さるゝまで其狂的暴動を止めないものである。吁憐れむべきかな、肉体的兇靈よ、其機關となりし人間の肉体よ、精靈よ。思うても肌に粟を生ずるやうである。あゝ惟神靈幸倍坐世。

（大正一二・一・二〇　舊一一・一二・四　松村眞澄錄）

みろくの世間近くなりて甲子の
秋のみまつり遙かに拜むも

瑞月

第二章　照魔燈（一二九六）

高天原の最奥に於ける靈國及び天國の天人は、すべて愛の善德を完備し、信の眞善を成就し智慧証覺に充ち居るを以て、中間天國以下の天人の如く、決して信を說かず、又信の何たるかも知らないのである。又神の眞に就いて論究せないのである。何故ならば、斯かる靈的及び天的最高天人は、大神の神格に充たされ、愛善信眞これ天人の本体なるが故である。故に他界の天人の如く、これは果して善なりや、悪なりや、なごと言つて眞理を爭はない。只爭ふものは中間及び下層天界の天人の内分の度の低いものの所爲である。又最奥の天人は視覺によらず、必ず其聽覺によつて卽ち宇宙に瀰漫せるアオウエイの五大父音の音響如何によつて、其証覺をして益々圓滿ならしむるものである。大本神諭に『生れ赤子の心にならねば、神の眞は分りは

致さぬぞよ…』とお示しになつてゐるが、すべて赤子の心は清淨無垢にして水晶の如きものであるから、假令智慧証覺は劣ると雖も、直ちに其清淨と無垢とは、最奥天界に和合し得るからである。又社會的羈絆を脱し、すべての物慾を棄て、悠々として老後を樂しみ、罪惡に遠ざかり、天命を樂しむ所の老人を以て、証覺ありて無垢なる者たることを現はし給ふのである。大本開祖が世間的生涯を終り、夫を見送り、無垢の生涯に入り給うた時、初めて神は豫言者として、これに神格の充されたる聖靈を降し給ひ、天國の福音を普く地上に宣傳し給うたのは、實に清淨無垢の身魂に復活し、精靈をして天國の籍におかせ給うたからである。故に開祖の如きは生前に於て已に靈的復活をせられたのである。此復活を稱して靈的人格の再生といふのである。大神は人間をして其齢進むに從ひ、之に對して善と眞とを流入し給ふものである。先づ人間を導いて善と眞との知識に入らしめ、これより進んで不動不滅の智慧に入り、最後に其智慧より佛者の所謂阿羅耶識（八識）即ち証覺に進ませ給ふものである。之を佛教にては、阿褥多羅、三藐三菩提心（無上証覺）といふのである。併しながら現代の人間は其齢進むに從つて益々奸智に長け、表面は樂隱居の如く世捨人の如く、或は聖人君子の如く裝ふと雖も、その實益々不良老年の域に進むものが大多數である。優勝劣敗、弱肉强食を以て社會の眞理と看做してゐる現代に立ち、多數の黨與を率ゐて政治界又は實業界に跋扈跳梁し、益々權謀術數を逞しうし、僅かに其地位を保ち、世間的權勢を掌握して無上の功名と看做してゐる人物の如きは、實に靈界より之を見る時は憐れむべき盲者である。斯の如き現界に於ける權力者よりも、無智にして其日の勞働に勤しみ、現代人の無道の權力に壓倒され、孜々として之に盲從し、不遇の生活を生涯送りし人間が、靈界に至つて神の恩寵に浴し、其靈魂は智慧相應の光を放ち、善と眞との德に包まれて、生前の位地を轉倒してゐる者が澤山にあるのである。故に靈的觀察より

すれば、權勢ある者、富める者、智者學者こいはるゝ者よりも、貧しき者、卑しき者、力弱き者、現界に於ていと小さき者として、世人の脚下に踏み躙られたる人間が、却つて愛善の德に住し、信眞の光に輝いて、天國の團体に圓滿なる生涯を送るものである。故に神には一片の依估もなく偏頗もない事を信じ、只管神を愛し神に從ひ、正しき豫言者の敎に信從せば、生前に於ても、假令物質上の滿足は得られずとも、其内分に受くる歡喜と悅樂とは、到底現界の富者や權力者や智者學者の窺知し得る所ではないのである。此物語の主人公たる初稚姫は再び天の命を受け、地上に降誕して大本開祖となり、世間的務めを完成し、八人の子女を生み夫々神界の内的事業に奉仕せしむべく、知らず〳〵の間に其任を果し、微賤に下りて、澄るゝ許りの仁愛と透徹したる信の智を發揮して、暗黑無道の地獄界を照破する神業に奉仕し、其任務を了へて、後事を瑞靈に充されたる豫言者に托し、茲に目出度く昇天復活されたのである。故に開祖は生前より其容貌恰も少女の如く、其聲音は優雅美妙にして、又少女の如く、玲瓏玉の如き顏容を抱持し給ひ、開祖に接近する者は、何時こはなしに其圓滿なる靈容に感化され、靈光に照され、善人は之を信從し尊敬し、惡人は之を嫌忌し恐怖したのである。開祖の前身たる初稚姫も亦神代に於ける神格者にして、大豫言者であつた。その容貌及び全身より金色の光明を放射し、惡魔をして容易に近づき得ざらしめたのである。されど初稚姫は、其靈德と靈光を深く秘し給ひ、和光同塵の態度を以て普く萬民を敎化し天國に救はむため、ワザと其神相を隱し給ひて、靈的及び自然的活動を續け給うたのである。開祖は常に云はれた……出口直が正体を現はしたなれば、人民は眼くらみ、到底側へは寄りつくことは出來ない、故にワザとに世におちぶらし、今まで衆生濟度の爲に化してあつたのだ……と物語られた事は屢々である。此時側に親しく侍してゐた役員共は、開祖の平素の人格には敬服してゐたが、併し其お言葉の餘りに高調

的なるに對し、開祖が慢心をされたものゝのみ思うてゐた者も澤山にあつたのである。神は必ず順序を守らせ給ひ、相應の理に依りて和合の德を表はし給ふが故に、其對者に向つて餘り懸隔なき樣に現はれ給ふのである。故に對者の德と智慧の如何によつて、神又は開祖を見る所の目に非常の差等があるのは、已むを得ないのである。神は瑞月を呼んで大化物と豫言者を通じて宣らせ給うた。現代人は大化物の名を聞いて、大惡人の代名詞の如く或は權謀術數家の別稱の如く、又巧言令色、表に善を飾り虛僞を行ひ、世人を誑惑する惡人と認むる者も少くないのである。併し神格に充されたる者を、頑迷不靈の地獄界に籍をおける人間の目より見る時は、忽ち眼眩み頭痛み、息苦しくなり、癲狂痴呆と忽ち變じて、恐怖心に驅られ、その眞相を看取することは出來ないものである。故にかゝる人間の地位に立ちて豫言者を仰ぎ見る時は、大怪物ごより見ることが出來ないのである。吁斯の如き頑迷の徒をして、神の光明に浴せしめ、愛善の德に住せしめて、永遠無窮の天國の生涯を生きながらに送らしめむとするは、實に最大難事である。大正五年の事であつた。口述者は役員室に在つて神諭を繙く折しも、慌しく入り來りしは開祖の娘なる高島久子であつた。彼は前節に述べたる如き肉体的兇靈に心身を占領され、吾居間に走り入りて、恭敬禮拜し言ふ。『瑞の御靈樣、一大事が突發致しました。一厘の秘密をお知らせ申します』と言ふより早く、吾耳の側に口をよせ、齒のぬけた口から、臭い息と唾を、吾顏面にふきかけながら、下らぬ不合理に充ちたことを喋々と辯じ立てた。そこで瑞月は儼然として『誠の道に秘密のあるべき道理なし、秘密の祕は必ず示すといふことである。決して隱藏すべきものでない。耳もとに囁く如きは神人のなすべき所でない。これは体主靈從的人獸の敢へてする行爲である』と云ふや否や、高島久子の精靈は大いに怒つて、わが耳たぶを左の手にて引張り、右の手を以てわが頰をピシヤ〳〵と叩きつけ『義理天上日出神の秘密の

忠告を聞かねば、地の高天原は大騒動が起りますぞ。何うなつても日出神は知らぬぞよ』とわめき立て、狂ひまはつた。そこで瑞月は兇霊の憑依せるものなることを本人に懇々と諭してみたが、もはや兇霊に霊肉全く占領された彼女には何の効能もなかつた、のみならず大いに怒つて、吾喉元に飛びかゝり、咬みつかむとした。そこで瑞月は已むを得ず、右の人指を前に向けて『ウン』と一聲、神に祈つて、其両体を霊光に照すや否や、忽ちバタリと倒れて了つた。そこで瑞月は直に神に彼が爲に謝罪をなし、お許しを請うた。彼女はムク〳〵と立上り、口を極めて『變性女子の糞奴、糞先生の奴先生、小松林の悪魔奴』と喚き立てながら、長い廊下を韋駄天走りに開祖の居間に侵入した。忽ち久子に憑依せる兇霊は、開祖の容貌を拝するや、アッと仰向けに倒れ、キヤア〳〵と喚きながら、長廊下を毬の如くころげて、再びわが居間に逃げ歸り來り『奴開祖の糞開祖奴、これから俺が誠の艮の金神ぢや、變生男子も女子も此處を出て行け、これから地の高天原は、高島久子が艮の金神變生男子と現はれて、日出神を地に致し、大廣木正宗殿の霊を御用に使うて、神政成就の神業に奉仕するから、此方の申す事が耳に入らぬ奴は、一人も殘らず出てゆけ。金勝要神の身魂は我が強いぞよ。木花咲耶姫の生宮も譯が分らぬぞよ。これから此高島久子の体を借つて、誠の事を知らすぞよ』などと狂態を演じ、身体を切りに震動させて、猛悪の相を現はし、座敷の中央に仁王立となつて睨めつけてゐた。そこへ開祖は梅の杖をつきながら、障子をあけて一寸覗かれると、又もやキヤッと叫んで其場に顚倒し、毬のやうになつて表へ駈け出して了つた。後に至つて高島久子に聞けば、彼は云ふ……開祖の居間の障子を開くや否や、開祖の全肉体は金色燦爛たる光明にみち、そのお姿を熟視する能はず、忽ち恐ろしくなつて、妾の守護神が一生懸命に駈け出しました……と答へたのである。又彼女が自筆の筆先にも此事を明記してゐる。それから久子は表へまはり、金龍殿に

侵入した。そこには數多の役員や修業者が幽齋の最中であつた。久子は矢庭に暴れ出していふ……汝等盲役員、幽齋の修業などゝは以ての外だ、この生宮の申す事を聞け……と呶鳴りながら、修業に來てゐた河井芳男といふ青年を引捉へ、殿中に於て馬乘となり、其青年の首にジャウ〳〵こぬくい小便をたれかけ……汝の如き者は之にて結構だ……と喚き立て、狂態を演じてゐた。この事も高島久子の精靈が書いた筆先に自慢さうに記してある。すべて兜羯界の惡靈は順序を辨へず又善惡美醜の區別がつかないから、神聖なる金龍殿内に於て、人の首に小便をかけ、得意となつてゐるのである。而して彼はいふ……わが守護神は實に偉大なものだ、あの樣な聖き御殿に於て、外の者が小便をこかうものなら、忽ち守護神も肉体も神罰が當るのであるが、何をいつても神格が高いから、あの通りチツとも罰が當らなかつたのだ……と誇つてゐるのは實に濟度し難き難物である。丁度猫や鼠が、大神の鎮座ます神聖なる扉の中に巣をくみ、或は糞尿をたれても、神は畜生として看過し給ひ、之を懲め給はざると同樣の理である事を知らない癲狂痴呆者である。自愛心強く世間愛のみを以て唯一の善事と思惟しゐたる人間は、却つて斯かる奇矯なる行爲を以て、神祕の行爲となし、之を頑喜渇仰していふ……全くあの行ひは人間ではない、人間心で、何うして殿内に於て、而も人間の首に跨がり、小便がかけられようか、全く神樣の證據である……と斯う云つて感心するのである。彼等の云ふ如く決して人間ではない。併しながら神だと思つたら大變な間違ひである。スツカリ肉体的兜羯羅、惡魔が彼女の全身を支配して行うた所の狂態であるのである。

其後かれ惡靈は久子の肉体に對し、いろ〳〵と幻覺を示し、益々誑惑の淵に陷れ、或は一ケ月間の斷食を與へ、地獄の有樣を眼前に髣髴せしめ……汝わが言を用ゐざる時は、斯の如き無間地獄に陷落すべし。又わが言を信從し、わが頤使に從つて活動する時は、汝をして將來斯

の如き結構なる位地につかしむべし……と、或はたら〳〵或は威し、漸くにして開祖の身内たる肉体を、わが自由に驅使する事を得たのである。彼等が悪業を遂行せむとすれば、現界人の浅薄なる識見より見て、開祖の血統と生れし人間なれば、大丈夫、決して悪神の憑依すべきものでないと信用させ得るの便宜があるからである。かれ兇靈は無智なる久子の靈肉を完全に占領した上、地の高天原の靈光にゐたゝまらず、二三の迷へる信者を引連れ、一目散に八木へさして逃げ歸り、こゝに久子の記憶と信仰を基礎として、其想念中に深く入り込み、兇黨界の團体をして益々大ならしめ、大神の神業を極力妨害せむと企みつゝあるのである。さりながら久子其人は元來開祖を思ふ事最も深く且無智にして比較的其心も清ければ、遠の兇靈も開祖の神諭を非難することを得ず、且又厳の御靈、瑞の御靈を極力排斥し、誹謗しては其目的を完成し得ざるを知るが故に、表面に厳瑞二靈を尊敬し信從する如く裝ひ、先づ久子を誑惑し其口と手を以て世人を魔道に引入れむと企みつゝあるのである。之は決して瑞月が卑しき心より述ぶるのではない。大神の御子たる可憐なる精靈や人間をして、一人なりとも邪道に陷らざらしめむが爲の慈愛心に外ならぬのである。かれ精靈は久子の肉体を綾部の停車場に仰向けに倒し、陰部を曝して大呼して云ふ……われは地の高天原の變性男子出口直の肉体をかりて生れた日出神の生宮であるぞよ。皆の者、これを見て、大本の教を悟れよ……と呶鳴り立てた。精靈が久子に斯かる衆人環視の前にて狂態を演ぜしめた其底意は、要するに神の名を冒瀆し、世人をして大本を信用せしめざらむが爲の悪計であつた。されど暗愚なる信者は、そんな所に少しも注意せずしていふ……あゝ吾々が改心が足らぬ故に神様が變性男子の系統の肉宮をかつて、お戒め下さつたのであらう、お前等の心は此通り醜いのだ、お前達が神界より罰せられ、地獄の釜の底へ落されるのだが、高島久子に千座の置戸を負はして助けてやつて居るぞよ、この深き思

召であらう……なごと妙な所へ曲解して益々隨喜渇仰し、精靈の誑惑に乘せられて、遠近の神社を調査するこいつて、或は其費用を献じ、或は隨伴してゐる者も澤山現はれて來たのは、實に神界の爲悲しむべきことである。されど神は決して斯の如き兇靈に汚され給ふものでもなく又如何に妨害せむとするも聊かの痛痒も感じ給はないのである。只々可憐なる神の御子が彼等兇靈に心身を誑惑され邪神界に引入れられ、無間地獄に陷落しゆくを悲しみ給ふのみである。かゝる仁慈無限の大神の御心も知らず、男子が何うだとか、女子の言行がなんだとか云つて、その光明に反き、醜穢極まる地獄に轉移するは、實に仁慈の目より見て忍び難き所である。かれ精靈は久子を又もや八木の停車場に連れ行き、大聲叱呼して云ふ……此女は元を糺せば、丹波國何鹿の郡綾部町、本宮新宮坪の内、變性男子の身魂出口直の体をかり、出口政五郎といふ父を持ち、若い時から男女と呼ばれたる、ヤンチヤ娘の出口久子、人は神の因緣に依つて、八木の高島寅之助が妻となり、あの山の、山のほでらのあばらや住居、人はおちぶれて居れごも結構な身魂が世におこしてあるぞよ。侮りて居りたものは、アフンと致してあいた口がすぼまらぬぞよ。今に天地がかへるぞよ。慾を致して澤山の金をためて居りても、其實は持切には出來ぬ實であるぞよ。此神の申した事には一分一厘間違ひはないぞよ。先をみてゐて下されよ、と前をまくつて大音聲……と自ら呼ばはり、停車場に集まる人々を驚かせ、之を鎮定せむと入り來りし長左といふ男の腕にかぶりつき、狂態を演じ、大本の教を破壞せむと企んだ事もあつたのである。兇靈に此筆法を以て、或時は變性男子を極力賞讃し、また對者の心の中に男子女子を否むと認むる時は、聲を秘めて切りに誹謗し、吾輩籠中のものとなさむと企むものである。

さて初稚姫と高姫との今後の活動は之に類するもの多ければ、卷頭に引證することゝしたの

である。

追伸＝靈界物語の讀者の中には凡て、斯樣であります……とか、斯う考へます……とかいふ謙讓の言葉がなく、かうである……ごうである……なぞと斷定的に、且高壓的に口述してあるのは、所謂口述者が慢心した結果、かゝる不遜の言辭を弄するのだと非難する人が間々あるさうです。併しながら『あります』と云へば活字を四字用ひなくてはなりませぬ『ある』といへば二字で事がすみます。それ故にかゝる洪翰な物語には一字なりとも冗言を省き、可成數多の意味を讀者に知らさむが爲の忠實なる意思より出でたのであります。而して口述者自身は只神格にみたされたる聖靈に靈と体を任せきつてゐるのでありますから、口述者が之を改めようと致しましても、肝腎の局に當る聖靈が聞かれなければ是非ない事であります。一寸茲に一言斷つておく次第であります。

（大正一二・一・二〇　舊一一・一二・四　松村眞澄錄）

瑞月

神の國靈界聖談など讀みて
秋の長夜を天國に遊ぶ
湧き出づる思想の泉汲みておく
術さへもなき今日のわれなり

第三章　高魔腹（一二九七）

初稚姫は祠の森の神殿に參拜し、長途の遠征を守らせ給へと祈願をこらし、再び高姫の居間へ引返した。高姫は遠く從うて神殿近く進み、初稚姫の後姿を打眺め、何處ともなしに其神格の完備せるに打驚き舌をまいた。そして高姫は其神格に感じ、心の底より初稚姫を神の如く尊敬した。併し乍ら何處ともなく恐怖心に驅られ、且其神格の偉大なるに稍嫉妬の念を兆したのである。今まで初稚姫の大神格に壓倒され、暫し高姫の身体内に潜みて沈默を守つて居た金毛九尾の惡狐は、高姫が少しく嫉妬心の兆したのを幸ひ、其虚に入り忽ち囁いて云ふ。

『吾は汝の略知る如く、神代に於て常世姫命に憑依し罪惡の限りを盡した金毛九尾白面の惡狐である。併しながら時節來りてミロクの大神、地上に降臨し給ひし上は、吾等は何時迄も惡を續ける譯には行かぬ。吾は惡の張本人なれば世の中一切の惡神の企みは皆知つてゐる。惡に強ければ善にも強い。吾は金毛九尾白面の惡狐だ。そして汝は常世姫命の身魂の再來だ。もう斯うなる上は一切萬事を打ち明けて、惡の企みを瑞の御靈の大神におしらせ申さねばならぬ。就いてはあの初稚姫は稚櫻姫命の再來なれば、到底汝等の匹敵すべき神人ではない。寧ろ吾よりトコトン改心を致すべければ、汝も彼の初稚姫を師と仰ぎ、共に神業に參加すべし』

と甘く高姫を誑惑してしまつた。高姫は兇靈の言を深く信じて初稚姫に對する態度を一變した初稚姫は神殿の拜禮を終り、階段を下りながら心私かに思ふやう、

『彼高姫には金毛九尾の惡狐の靈憑依せり。而して彼惡靈は形体を有するものなれば、吾眞相を現はさば忽ち彼が肉体を亡ぼすか、但しは遁走して又もや相應の肉体に住居を構へ

世を惑亂するに至らむ。如かず吾は和光同塵の態度を極力維持し、彼の惡靈を高姫の肉体に長く殘留せしめ、彼が根本より改心すれば重疊なれども、萬一改心せずとも高姫の肉体中に秘め置かば、彼精靈は外に出づる虞なし。要するに高姫の肉体は天下を亂す惡靈をつなぐ處の牢獄と見ればいゝ。もとより徹底的兇靈なれば、神の光明に照されなば、兇靈は忽ち自暴自棄となり、益々神業の妨害をなすべし。如かず神慮に背くかは知らざれども、暫く吾は猫を被つて彼と交際し、何時とはなしに高姫と精靈とを天國に救ひやらむ』

と決心し、大神に念じながら素知らぬ顔にて高姫の居間に歸つて來た。精靈は高姫の口舌を使用して、いとやさしげに言葉を飾つて云ふやう、

『變性男子の御身魂初稚姫樣、よくも御降臨下さいました。私は三五教の宣傳使、御存じの高姫でムります。大神樣の御都合により惡神の張本金毛九尾の惡狐が私の肉体に潜み入り、私の眞心に感化されて漸く改心を致しまして、今迄の惡をスツクリ白狀致しました。就いては凡ての惡神の企みは何も彼も存じて居ると申して居りますから、私が守護神と共に此祠の森に大門を造り、凡ての人民の因緣をよく調べ改心をさせた上、齋苑の館へ送る考へでムります。何卒此事をお許し下さいます樣に、變性男子の御靈樣、お願ひ申します。そして一方には變性男子の系統なる義理天上日出神が、嚴の御靈の御命令によりまして世界中を調べに歩き、世の初まりの根本の〳〵成り立ちから、人民の大先祖の因緣、大黒主の身魂は如何なる因緣があるか、龍宮の乙姫のお働きは如何なるものかと云ふ事を知らしたいのでムります。今の三五教には宣傳使は澤山ムりますが、皆智慧、學で神界の事を考へようと致すのでムりますから何も分りませぬ。貴女は變性男子の生粹の大和魂の善の神樣でムりますから、何も彼も三千世界の事は御存じでムりますが、外の守護

神や宣傳使や信者はサツパリ駄目でムります。それ故此處に大門を拵へ、私が一々因縁をあらため、齋苑の館へ參拜さす御役にして下さいませぬか』

と兇靈はうまく高姫に化けて虫のよい事を頼みかけた。初稚姫は彼が奸計を殘らず看破した。されど前述の如く初稚姫は此惡靈を審判する事を避けられたのである。

『貴女は信心堅固にして靈界によくお通じ遊ばした方と見えますな。妾は賤しき杢助の娘と生れ、まだ年も若く、社會的の經驗さへも積んでゐない愚者でムりますから、到底靈界の消息等は分りませぬ。就いては貴女に對し左樣の事をお許し申すなどは以ての外の事でムります。何れ神樣が貴女の御神力をお認め遊ばしたならば、屹度瑞の御靈の大神樣からお許しがムりませう。妾には左樣な權限は少しもムりませぬから、左樣な事を仰有らない樣にお願ひ致します。何卒至らぬ妾、神德高き貴女樣より御教授を御願ひ致したいものでムります』

と一切の光明を包み、普通人の如くなつて了つた。高姫はニタリと打笑ひ、

『アー、さうだらう〳〵、それが正直の處だ。まだ年も若い癖に宣傳使に歩かすとは、瑞の御靈樣も餘程物好きな珍らし物喰ひだな。ぢれ〳〵此高姫がこゝで根本の〳〵因縁を說いて聞かしますから十分修行をなさいませ。それでなければ、譯も分らずに宣傳に歩いたり、大祟主を言向和すなどは、以ての外の無謀のやり方でムりますからな』

『何分、至らぬ妾、老練な貴女樣の御煮陶をお願ひしたいものでムります』

『ハイ、よし〳〵、お前は水晶魂だ。本當に妾直な可愛い娘だな。これから此小母さまの云ふ事を聞くのだよ。否小母さまではない、絶つてもきれぬ母子だから、そのつもりでつき合つて下さいねー』

初稚姫は心に打笑ひながら故意と空惚けて、

『小母様、今貴女は妾ときつてもきれぬ母子だと仰有いましたが、それは身魂の母子でムりますか。チツとも愚鈍の妾には合點が參りませぬヲ』

『身魂の母子は申すに及ばぬ、お前さまは李助さまの大切の娘だらう。其李助さまは此度神様の因縁によつて常世姫命の改心した善の折の生粹の肉宮の此高姫の夫とおなり遊ばしたのだよ。李助様だつて、此高姫だつて、よい年をしてから若いものか何ぞの様に夫婦になつたり、そんな見つともない事はしたくはない。胸に燒鐵をあてる様に思うてゐるのだが、これも神様のため、萬民を救ふため、千座の置戸を負うて御神業に參加してるのだよ。譯の分らぬ人民がいろ〳〵と申すであらうなれど、人民の申す事に心を惱まして居りたらミロク神政の御用が勤まりませぬ。譯知らぬ人民は、李助、高姫の結婚を何となつと申して笑へば笑へ、誹らば誹れ、神のお仕組一厘の秘密が如何して一寸先も見えない人民に分るものか、と云ふ磐石の如き決心を以てこゝに夫婦の約束を結んだのだから、初稚さま、貴女もそのお積りで、私を母と思つて下さいや、私も貴女を大切の〳〵御子と致して敬ひますから、母となり子となるのも昔の〳〵さる昔、も一つ昔のまだ昔の天地開闢の初めから大神様より定められた因縁ぢやによつて、何卒その覺悟でゐて下され。何事にも素直なお賢いお前さまだから、此高姫の生宮の申す事、よく呑込めたでせうなア』

初稚姫は李助の本物でなく、獅子と虎との中間動物なる兇靈に騙されてゐる事はよく看破して居た。されど故意と空惚けて、

『高姫さま、私の父が何時そんな事を貴女と約束致しましたのですか、私今が初耳ですわまア〳〵〳〵不思議な御縁でムりますこと。さうしてお父さまは何處へ行かれましたの』

『一寸此森の中へ散歩にお出でになつたと見えます。李助様は森の散歩が大變にお好きだと見えましてね。お前さまが此處へ訪ねて來られた事をお聞きになつたら、嘸喜ばれるでせう』

『はて、妙な事だわ。妾のお父さまは齋苑の館の總務を勤めて居らつしやるのだから、こゝへお越し遊ばす道理はありませぬがな』

『これ初ちやま、お前の、さう疑ふのも尤もだ。實の處は李助さまは、あの我の強い東野別の東助さまと云ふ副教主との間に事務上の衝突が起り、それがために齋苑の館を追ひ出されなさつたのですよ。東助の野郎、正直一途の英雄豪傑、三羽烏の御一人なる李助さまを追ひ出すとは以ての外の惡人ぢやありませぬか。あの東助はやがて今迄目の上の瘤の樣に困つてゐた李助さまを首尾よく追ひ出し、齋苑の館の全權を掌握し、終には八島主の教主さまをおつ放り出し、自分が其後釜にすわると云ふ野心を抱いてをるのですよ。それでお前と私が此處で一肌脱いで、齋苑の館へ參る信者を小口から虱殺しに調べ、齋苑の館へやらぬ樣にせねばなりませぬ。私がこゝで李助さまと大門開きをしたのは、李助さまや八島主の教主がお困りになつた時、お助け申すやうにチヤンと仕組をしてゐるのだから、お前さまも何處へも行かず、此處に居つて親子三人御用を致さうぢやありませぬか』

『それは又不思議な事を承はります。東助樣はそんなお方ぢやない樣に思ひますがな』

『それが善の假面を被つてゐる惡魔ですよ。屹度惡人は惡相を以て現はれるものぢやありませぬ。所在虛僞と僞善を以て人民を詐り、虛榮的權威に甘んじてゐるものですよ。これ初稚さま、油斷してはなりませぬぞや。此高姫は海千川千山千の修業をした善にも強い、惡にも強い、そして惡の企みは何も彼も看破してゐるのだから、一分一厘間違ひはありま

せぬよ』

『あの東助さまは小母さまの若い時のお馴染だつたさうですな。そんなに惡口を云ふものぢやありませぬよ。父の杢助に比ぶれば、幾層倍人格が上だか知れぬぢやありませぬか』

『ヤツパリ子供だな。然し子供は正直ぢや。何と云つても水晶魂だから心に罪がないので表面から良く見える人を信用なさるのだ。そこが本當に尊い處だよ。然し高姫の云ふ事はチツとも違ひませぬぞや』

『さうで厶りますかな。一遍父に會つてみたいものですがな。もし小母さま、長上をお使ひ申して眞に濟みませぬが、一度お父さまに會ひたう厶りますから、探して來て下さいませぬか』

『アヽさうだろ〳〵、無理もない。親子の情と云ふものは本當に尊いものだな。吾身を捨てる藪はあつても吾子を捨てる藪はないと云ふ事だが、杢助さまも何も彼も天眼通で知つて居りながら、こんな可愛い娘が來て居るのに、そしらぬ顏して森に散歩してゐなさるとは本當に水臭い方だな。子の心、親知らずだ。然し初稚さま、此高姫は斯う見えても本當にやさしいものですよ。杢助さまに比べて幾百倍も可愛がつてやりますから、何卒私を本當の母だと思つて下さいや』

『ハイ、御親切有難う厶ります』

と俯向いて見せた。

『これ初稚さま、一寸待つてゐて下さい。お父さまのあとを探して今直に屹度連れて參りますから』

と云ひながら羽ばたきしつゝ欣々として森林の方に行く。高姫は森の茂みに隱れて後ふり返り

舌をニユツと出し、いやらしい笑みを漏しながら獨言、

『何と云つてもヤツパリ子供だな。然しながらあの娘は何所ともなしに氣高い處もあり、中々シヤンとした事を云ふ。あれをうまくチヨロまかし自分の子として置けば、三五教は吾手に握つた樣なものだ。何と都合のいゝ事になつたものだな。これから一つでも、うまい物があつたら、あの娘に與れてやり、そして十分懷かして置かねばならぬ。然し都合のいゝ事には杢助さまが私の夫だから、切つても切れぬ仲だ。あゝ有難うムります、八岐の大蛇樣、金毛九尾の大神樣』

と口の中から囁いた。高姫は此聲に驚いて目を怒らし、臍の邊を握り拳でトン〳〵と打ちながら、

『こりや、金毛九尾の惡狐奴、何と云ふ事を申すのだ。左樣な事を申すと、もう此高姫は肉体を借さぬぞや。杢助さまや初稚姫の傍で、そんな事でも云うて見よれ。此高姫は立場がないぢやないか。改心致したと云うたぢやないか』

腹の中から、

『こゝは誰も居ないから一寸云つて見たのだから、さう怒るものぢやない。メツタに人の居る處で正体は現はさぬから安心しておくれ』

『よし、屹度守るか、うつかりした事を申すと常世姫の生宮が承知しませぬぞや。これから八岐大蛇や金毛九尾はスツカリ改心致して、あゝへ日出神の義理天上が這入つてゐると何處までも主張するのだよ。よいか、分つたか。馬鹿な守護神だな』

腹の中から、

『何とまア、我の强い、向ふ息のきつい肉体だな、アハヽヽヽ』

（大正一二・一・二〇　舊一一・一二・四　北村隆光錄）

瑞月

神々の御宣を傳へ示さむと
おもふ甲斐なき今日の吾なり

赤心のあらむ限りを盡しつゝ
天にとどかむ時待つ久しさ

第四章　御意犬（一二九八）

初稚姫は高姫の往つた後で、小さい聲で、ホ、、、、、と吹き出さずには居られなかつた。さうして自分の笑ひ聲に驚いて小聲で獨言、

『高姫さまも氣の毒なものだなア。さうして金毛九尾の惡狐奴、又もや祠の森に頑張り、齋苑の館の御神業を妨害し、數多の精靈や人民を迷はさうと思つてゐる。其遣方の奸黠さ憎らしさよ。高姫さまは熱心な人だけれど、常識が足らないから、いつも狂妄に陷り易くあの通り惡魔の擒となつて了つたのだなア、ごうぞして助けて上げたいけれど、一つ目を醒まさなければ、到底復活の見込はない。肉体をもつて居る獅子、虎兩性の妖魅に誑惑され、父の李助と思つて居るのはほんに氣の毒なものだつ高姫さまに憑依して居る金毛九尾

の悪狐は、高姫の肉体を通してでなければ現界を見る事が出來ないのだから、あのやうな怪物にだまされて居るのだ。悪霊自身も高姫も、其怪物たる事を知らない。高姫自身は兎霊は認めて居るが、あの怪物の方からは高姫に憑依して居る金毛九尾の正体は見る事は得ないのだ。つまり妖怪と妖怪とが高姫さまの肉体を隔てゝ暗中摸索的妄動をやつて居るのだ。併しこれが大神様の水も漏らさぬ御注意の點である。杢助さまに化けた怪物と高姫身内の悪狐とが互に素性を知り合ひ、又其姿を認め得たならば、内外相應じて高姫を愈悪化せしめ、如何なる害毒を天下に流すか知れたものぢやない。あゝ有難い神様の思召し』と感涙に咽んで居る。スマートは初稚姫の膝に頭を横たへ、初稚姫の獨言を了解するものの如くであつた。

『これスマートや、お前は行儀の悪い、なぜきちんとお坐りなさらぬのだい』

スマートは耳をペロ〳〵と動かしながら、まだ起きようともしない。

『あゝさう〳〵、スマートや耐へてお呉れ。お前さまは足を怪我したのだな、坐りなさいと云つたつて坐れないのは無理はない。これは私が悪かつた、許してお呉れ』

とやさしく頭を撫でてやる。スマートは嬉しさうに尾をふつて感謝の意を表するものの如くであつた。

スマートはムツクと起き、體をブリ〳〵と振りながら、形相凄じく前の足を立てゝ何物にか飛びつくやうな勢を示した。さうしてウーウーウーウと小聲で唸つて居る。初稚姫はスマートを撫でながら聲も優しく、

『これスマートや、何が來たのか知らないが、お前は必ずイキリ立つてはいけませぬよ。私が命令をするまで、どんなものが來ても、決して唸つたり飛びついたりする事はなりま

せぬぞや。私だつて何も彼もよく知つてゐるのだけれど、これには少し譯があるのだから何卒おとなしうして居てお臭れや』

と諭せば、スマートは首を垂れ尾をふつて承諾の旨を表示した。

『ほんに畜生ながら賢いものだなア。お前は私の家來だよ。私と何處までも一緒について來るのだ。さうして立派な御神業を完成した上は、再び人間と生れ變り、立派な宣傳使となつて世界萬民を導き、天國に安樂な生活を送らして頂くやうに忠實に務めるのだよ。ほんにお前は何處ともなしに變つた犬だ。勇猛にして且柔順な理想的なお前は犬だ』

と頬に頭や首を撫で可愛がつて居る。スマートは漸くにして足をかゞめ、壘に顎をすりつけ、目を寒いで柔順な態度を示して居る。

『あの杢助と化相した怪物を、スマートがよく看破し、最前も追つ驅けていつて搭闘の末こんな傷を負つて來たのだな、ほんに勇敢なスマートだ』

と激賞して居る折もあれ、例の高姫は靜々と歸つて來た。

『アヽお母さま、御苦勞樣でムいました。父は居られましたかな』

『ハア、やつぱりこの事でお目にかゝつて來ましたよ。杢助さまは森林を逍遙なさる際、藤葛に足を引掛け、岩石に眉間を打ちつけ、大變な傷をなさつて、谷川で傷を洗つて居られました』

之を聞くよりスマートは又もやムックと頭を上げ、ウーウと唸りかけた。初稚姫は慌てゝ頭を撫でながら、

『これスマート、おとなしくするのだよ。主人の云ふ事を聞きなさいや』

と靜になだめながら、

『はてな、怪物はこのスマートに眉間を嚙まれたのだな』

と鋭敏の頭腦に直覺した。されど素知らぬ体を裝ひ、言葉柔しく滿面に笑を湛へながら、

『あのお母さま、お父さまは本當にお危ない事をなさいましたなア。大した事はムいませぬか。私、心配でなりませぬわ。そして直に歸つて下さるのですか』

『別に大したお怪我でもありませぬが、中々我の强いお方で、お前さまがお出でだと云つても、容易にお動き遊ばさぬのですよ』

『父は私の事を何と云つて居ましたか、定めて怒つたでせうなア』

『何、初さま、自分の娘が來て居るのに怒る人がありますか。そんな事怒るやうな方だつたら人間ぢやありませぬわ』

『それでも私の父はハルナの都の御用が濟むまで、どんな事があつても面會は致さぬと

それは〳〵嚴しう申して居ましたよ』

『そこが李助の李助さまたる所だ。ほんとにお偉い方ですよ。母の愛は舐犢の愛、父の愛は秋霜の愛と云つて、云ふに云はれぬ所があるのです。何程嚴しく仰有つても、本當の心の中は母親の愛に優る千萬無量の涙を湛へてムるのだからな、併しこの高姫は切つても切れぬ身靈の親子でもあり、肉体上の義理の親子でもありますから、其愛の分量は、到底生みの母の及ぶ所ではありませぬ。どうぞ打ちとけて此母の云ふ事を守つて下されや』

『ハイ承知致しました。何分にも宜敷くお願ひ申します』

『早速ながら初稚さま、私の云ふ事を聞いて貰へますまいかなア』

『これは又改まつてのお言葉、私のやうなものにお賴みとは、どんな事でムいますか』

『實の所は、お前の折角可愛がつてムるこの犬を、いなして貰ひたいのだ。李助さまは犬

が大變お嫌ひだから、「この神聖の館にそんな四つ足を入れることはならぬ、聖場が汚れるから、いなして呉れ、さうでなければ私は此處には居ない」と、それは〳〵堅う〳〵仰有るのだよ』

初稚姫はそれと感づきながら、態と空惚けて、

『何と不思議な事でムいますなア、私の父は特別犬が好きなのでムいますが、齋苑の館でも、往き復り、犬を離した事はないのでムいますよ。それに心機一轉遊ばすとは不思議ぢやムいませぬか。それ程この犬が怖い、イヤ嫌ひなのでムいませうかなア』

『何と云つても此處は神聖なお仕組の場所、汚れた四足を置いておくと大神樣のお氣障りになるから、杢助が神樣に對し謹愼の意を表し、犬をいなせと仰有つたのですよ』

『それでも產土山の聖場には澤山に犬が飼つてムいます。御本山でさへもあれだけ澤山の犬が居るのに、何故此處には一匹も置く事が出來ないのでせう。私この犬が唯一のお友達でもあり力でもあるのですからなア』

『初稚さま、お前さまはこの犬を離すのが嫌と仰有るのですか。產土山に澤山の犬が居るのは、素盞嗚尊樣や八島主さまや東助や役員の方の御靈が憑つて居るのだから、結構な聖地に四つ足がうろついて居るのだ。又狐の靈や豆狸が入り込まないやうに犬が置いてあるのだ。御神德さへあれば犬の力を借らなくても、狐や狸や大蛇や蟇の靈が出て來るものぢやありませぬ。產土山に犬が置いてあるのを見ても、御神德がないのが分るぢやありませぬか』

初稚姫は、高姫の暴言に呆れながら、さあらぬ態にて柔しく空惚けて、

『左樣でムいますかなア、御神德と云ふものは尊いものでムいますなア』

と相槌を打つて居る。

『道は李助さまの娘だけあつて、何につけても悟りがよいわい。ほんに水晶の御靈だ。さう早くものが分つた以上は、此犬を齋苑の館へおつ歸して下さるだらうねえ』

スマートは二人の問答を聞いて不安に堪へ兼ねたやうな形相をしながら、又ウーウ〳〵と小さく唸り出した。初稚姫はスマートの頭を撫でながら、耳許に口を寄せ何事か小聲に囁いた。スマートは柔順に頭を下げ目を塞いで仕舞つた。

『サア、お父さまの云ひつけだから、ごうぞ早くいなして下さい。それが親に對する一番の孝行だ。そして神樣に對する廂柱の大道だから、きつと柔順にかへして下さるだらうねえ』

初稚姫は打ち首肯き、

『お母さまやお父さまのお言葉、背いてなりませうか。大事の〳〵スマートでムいますけれど、御兩親の仰ごあれば、背く譯には往きませぬ。アヽ殘念ながらスマートに別れませう』

『なんぢまア柔順なよい娘だこと、ほんとうに李助さまは、ごうしてこんな立派な娘をお持ちなさつたのだらう。八島主さまが宣傳使になさつたのも無理はないわい』

と初稚姫を無性矢鱈に褒めちぎつて居る。

『お母さま、犬位いなしたつて、さう褒めて貰ふやうな事がムいませうか。ごうぞお氣遣ひ下さいますな。併し畜生ごはいへ折角此處まで連れて來たのですから、門口か又は一二町許り送つてやりまして、そこで篤り云ひ聞かせ、再びこゝへ歸つて來ないやうに申し聞かせます』

『オホ、、、何ごまア御叮嚀な御子だこと、門口から追ひ出せばよいものを、御主人か何ぞのやうに、お前さまが送つてやるこは、些こ分に過ぎはしませぬか、オイ畜生、お前は冥加に盡きるぞや、私の娘に送つて貰ふなぞこは果報者だ。併し乍ら此高姫も何だか此犬が怖ろしい、イヤ〳〵怖い嫌ひなやうな氣がして居たのよ、アヽこれでやつこ安心した。金毛九尾も……』

こ口から云ひかけてグッこ口をつまへ、自分の腹をギュー〳〵こ揉みながら、

『こりや、氣をつけぬか』

こ吾こ吾身をきめつけて居る。初稚姫は又空惚けて、

『お母さま、「氣をつけぬか」こ仰有いましたが、何か不都合がムいますか。何卒至らぬものでムいますから、御注意を下さいませ』

『エ、、イヤ何でもありませぬ、つひ一寸何です……此聖地は何彼につけて神聖な所だから、萬事氣をつけねばならぬこ云つたのですよ』

『ハイ有難うムいます。一寸其處まで犬を送つて參ります。お母さま、此處に待つて居て下さい。やがてお父さまも歸つて下さるでせう』

こ言葉を殘し、スマートを伴ひ一二町ばかり坂の彼方に進み、山の裾に隱れて館の見えない地點までスマートを伴ひ往き、頭や首背を撫でながら、

『これスマートや、お前は偉いものだなア、杢助に化けて居る怪物や、高姫の身内に潜んで居る惡い狐がお前を大變怖がつて居る。それだからあのやうに二人が私に「お前をいなして呉れ」こ迫るのだよ。併し私はお前こ主從の約束を結んだ以上は、假令半時の間だつて離れるのは嫌だよ。お前だつてさうだらう。併し今の場合どうする譯にも往かないから

一旦お前は歸んだ事にして、日が暮れたらそつと私の居間の床下に隱れて居て下さい。御飯をソツとお前の腹の減らないやうに上げるから』

と懇々と諭せば、スマートは尾をふり首を數回も縱にゆりながら「萬事承知致しました」と云ふ心意氣を表情に示して居る。

『分つたかな、ア、それで私も安心した。きつと私が此處に居る間は姿を見せないやうにして下さい。併し又、夜分には戀しいお前さまと抱合つて遊びませう。お前さまは雌犬だから、私と抱擁したつてキッスをしたつて、構ひはしないわネー、ホ、、』

と笑ひながら別れて館に歸つて來た。スマートは日の暮るゝを待ち兼ね、ソツと初稚姫の居間の床下に身を忍ばせ、主人の云ひつけをよく守り、且初稚姫の保護の任に當る事となつた。

（大正一二・一・二〇　舊一一・一二・四　加藤明子錄）

第二篇　兇黨擡頭

第五章　靈肉問答（一二九九）

高姫は初稚姫のスマートを送つて出た後に只一人、腹中の兇靈に打向ひ、握り拳を固めながら、懷をパッと開き、布袋つ腹を現はし、兩方の手で臍のあたりを摑んだり擲つたりしながら、稍聲低になつて、

『コリヤ、其方はあれだけ注意を與へておくのに、なぜ初稚姫の前で、あんな不用意な事をいふのだ。サア、高姫が承知致さぬ。一時も早く、トットと出てくれ。エー何と云つてもモウ許さぬのだ。汚らはしい、コリヤ、痰唾をはつかけてやらうか』

と云ひながら、自分の臍のあたりに向つて、青洟をツンとかんでこれをかけ、又々唾をピューく〜と頻りに吐きかけてゐる。

『アハ、、、、これだけお前が痰唾を吐きかけようが、腹を捻ぢようが、チッともおれは痛くはない。つまりお前の腹をお前が痛め、お前の唾をお前がお前の腹にかけるだけのものだ。そんな他愛もない馬鹿を盡すよりも、日出神義理天上の申すことを神妙に服從するがお前の身の爲だぞ。グヅ〳〵申すと腹の中で暴れさがし、盲腸を破つてやらうか、コラごうぢや』

『アイタ、、、、コリヤ〳〵そんな無茶な事を致すものでないぞ。結構な〳〵常世姫の御肉体だ。左樣な不都合を致すと、大神樣に御屆け致すが、それでも苦しうないか』

『や、そいつァ一寸困る、何を云うても我の强い肉体だから、思ふやうに使へないので神も聊か迷惑を致して居るぞよ。チッと柔順くなつて御用を聞いて下されよ』

『何を吐しやがるのだ。又しても〳〵しようもない事を吐して、人に悟られたら何とするのだ。本當に馬鹿だな。これから此方が嚴しく審神を致すから、一言でも變なことを申したら、此生宮が承知致さぬぞや』

『イヤ、肉体の言ふのも尤もだ、キッと心得るから、ごうぞ仲ようしてくれ。何と云つても密着不離の關係になつてゐるのだから、お前の肉体のある間は、離れようといつたつて離れる譯にも行かず、お前も亦俺を追ひ出さうとすれば、命をすてる覺悟でなくちや駄目だぞ。すぐに盲腸でも十二指腸でも、空腸、回腸、直腸、結腸の嫌ひなく、捻ぢて〳〵捩ぢ廻し、肉体の命を取るのだから、つまりお前は俺を大事にし、俺はお前の肉体を唯一の機關とせなくちや、惡の目的が成就せぬのだからなァ』

『コリヤ、又左樣なことを申す。この高姫は稚櫻姫命の身魂の系統、常世姫命の再來だ。惡といふ事は微塵でもしたくない、大嫌ひなのだ。其方は惡を改めて善に立復つたと

申したでないか。どうしても此方の肉体を使うて惡を致し、變性男子様の御神業を妨げ致すのなれば、此高姫は假令其方に腸をむしられて國替をしても、チツとも構はぬのだ。サアどうだ、返答致せ』

と審神者氣分になつて呶鳴つてゐる。

『ヤア高姫様、眞に申し違ひを致しました。つひ惡を憎むの餘り善と惡とを取違へまして あんな不都合なことを申しました。今後はキツと心得ますから、どうぞ靈肉和合して下さいませ』

『ウンよしツ、それに間違ひなくば許してやらう。此上一言でも金毛九尾だの大蛇だのと申したら了簡致さぬぞや』

『それなら、何といひませうかな、義理天上日出神と名乘りませうか』

『畏い事を申すな。義理天上様は變性男子様の系統の御身魂ぢや。其方はヤツパリ、ユラリ彦命と申したがよからうぞ』

『コレ高姫さま、さうイロノヽと澤山の名を言つちや、婆婆の亡者が本當に致しませぬぞや』

『コリヤ、何と云ふことを申す。人間は結構な神の生宮だ。天が下に神様のお守りを受けないものは一人もないぞや。言はゞ結構な天の神様の直々の、人間は御子だ。何を以て婆婆亡者なぞと申すのか、なぜ善言美詞の言靈を使はぬ。ヤツパリ其方は未だ本當の改心が出來て居らぬと見えるなア。改心致さな致すやうにして改心を致さし見せうぞや』

『高姫さま、一旦入の入つた瀬戸物は何程甘く燒つぎをしても、其疵は元の通りになほらないと同樣に、元來が身魂にヒビが入つてゐるのだから、本當の善に還る事は辛うて出來

ませぬぞや。お前さまの肉体だつて、ヤツパリさうぢやないか。入が入つて居ればこそ、此方が這入れたのだ。お前さまは立派な大和魂の生粹だと思つてゐるだらうが、此金毛九尾から見れば、大和魂どころか山子だふしの身魂だよ。相憑の理によつて、破鍋にトヂ蓋式に自然に結ばれた因縁だから、何程もがいても何うしても、此悪縁は切ることは出來ませぬぞや、お前さまも是非なき事と斷念して、吾身の因縁を怨めるより仕方がないぢやありませぬか。霊肉不二の關係を持つてゐる肉体と此方とが、何時もこれだけ衝突をして居つては互の迷惑……否大損害ですよ。チツとはお前さまも大目に見て貰はなくちや、わしだつて、さう苛められてばかり居つても、立つ瀬がないぢやないか』

『今迄なれば少々のことは大目にみておくが、お前も知つて居るだらう、齋苑館にムつた三五教の三羽烏杢助様がお出でになり、此肉体の夫となられ、又立派な娘の初稚姫が此處へ私の子となつて來たのだから、餘程心得て貰はなくては、今迄とは違ひますぞや。今迄は此高姫も殆ど獨身同様であつた。大將軍様の肉宮はあの通りお人よしだから、どうでもよい様なものだつたが、今度は摩利支天様の肉宮が、此肉体の夫とお成り遊ばしたのだから、お前さまの自由ばかりになつてゐる譯には行かぬから、其積りで居つて下されや』

『それは肉体のすることだから敢へて干渉はしないが、併しながら、初稚姫といふ女は何だか虫の好かぬ女だ。お前も物好な、他人の子を吾子にせなくてもよいぢやないか』

『馬鹿だなア、あの初稚姫は本當に掘出し物だよ。柔順で賢明で而して人には信用がある なり、あんな娘を使はずに、どうして神業が完全に出來るのだ。お前も改心して五六七神政成就の爲に活動するならば、これ程大慶の事はないぢやないか。變性男子様が永らくの間御苦勞御艱難遊ばして、此處まで廻柱の道をお開き遊ばし、又都合によつてウラナイ教

も御開き遊ばしたのだから、惡が微塵でもあつたら、此事は成就致しませぬぞや』

『それでも、お前、三五教をやめてウラナイ教を立てようと、昨日もいつたぢやないか。ごちらを立てゝ行くのだ。それからきめて貰はなくちや、此方も困るぢやないか』

『變性男子のお筆には……三五教ばかりでないぞよ。此神はまだ外にも仕組が致してあるぞよ。ウツカリ致して居ると、結構な神德を外へ取られて了ふぞよ……とお示しになつて居るだろ、此頃の齋苑館の役員共の行り方と云つたら、サツパリ變性女子の教ばかり致して、男子樣の御苦勞を水の泡に致さうとするによつて、お筆に書いてある通り、系統の身魂の此方が、已むを得ずしてウラナイ教を立てるのだ、併しながら秘密は何處までも秘密だから、表はヤツパリ三五教を標榜し、其内實はウラナイ教を立てるのだ。よいか、合點がいただらうなア』

『コレ肉体さま、ソリヤ二股膏藥といふものではないかなア。いつも惡は嫌だ〳〵と云ふ癖に、なぜ其樣な謀反を起すのだい。善一つを立てぬくのなれば、お前が舍身的活動をして三五教の過つてゐる行方を改良さして、一つの道でやつて行つたらいゝぢやないか。さうすると、ヤツパリ肉体も善を表に標榜し、自我を立て通す爲に結局惡を企んでゐるのだなア。サウすりや何も、わしのすることや言ふことゴチ〳〵いふには及ばぬぢやないか。同じ穴の狼だ。怪狼同狐の間柄ぢやないか。お前が善か、俺が惡か、衡にかけたら何方が上るやら、僅かに五十歩と五十一歩との違ひだらう。ごうぢや肉体、これでも返答がムるかな、ウツフツフ』

『コリヤ、喧しいワイ。そこは、それ、神の奥には奥があり、其又奥には奥があるのだ。切れてバラ〳〵扇の要……といふ謎を、お前は知らぬのか……十五夜に片われ月があるも

のか、雲にかくれてこゝに半分……だ』

『ハッハ、、イヤ、チッとばかり了解した。……此腹の黒き尉殿が一旦改心の坂を通り越し、又もや慢心と申す元の屋敷にお直り候……だな、イッヒッヒ。それならさうと、なぜ初めから云つてくれないのだ。コッチにも方針があるのだから……俺も昔から金毛九尾と云つて、隨分惡は盡して來たのだが、腹の黒い人間の腹中は、自分が現在這入つて居りながら、分らぬものだ。いかにも人間といふものは重寶なものだなア。僞善を徹底的に遂行するには、本當に重寶な唯一無二のカラクリだ、イッヒヒヒ。それを聞いて此金毛九尾もスッカリと安心を致したぞや。サア始めてお前が打ち解けてくれたのだから、今日位心地よいことはないワ、のう大蛇よ、猿よ、狸よ、蟇よ、豆よ、本當に岩戸が開けたやうな氣分がするぢやないか』

腹の中から違うた聲で、

『ウン〳〵〳〵、さう〳〵、これでこそ、私たちも安心だ。流石は金毛九尾さまだけあつて、よくマア肉体と、其處まで談判して下さつた。あゝ有難い〳〵』

腹中より又もや以前の聲で、

『さうだから、此金毛九尾さまに從へと云ふのだ。これから高姫の肉体をかつて、三千世界を自由自在に致すのだ。それに就いては先づ第一に三五教を崩壞し、ウラナイ教を立てゝ善の假面を被り、現界の人間を片つ端から兒黨界に引張り込んで了ふのだ。最早肉体が心を打ち開けた以上は、何と云つても宣り直しはさゝない。若しも最前の言葉に肉体が反きよつたら、お前たちはおれの命令一下と共に、そこら中を引張りまはし苦めてやるのだよ』

『コラ、そんな無茶な相談を致すこいふことがあるか、表は表、裏は裏だ。さうお前のやうに露骨に云つちや、肝腎の大望が成就せぬぢやないか』

『何、お前の耳に内部から傳はるだけのもので、決して外部へは洩れる氣遣ひはない。お前さへ喋らなかつたら、それでいゝのだ』

『ソリヤさうだな、それならマア、十分にお前も千騎一騎の活動を致すがよいぞや。この高姫も乘りかけた舟だ、何處までも初心を貫徹せなくちやおかないのだからな。ドレ〳〵モウ初稚が歸つて來る時分だ。思はず守護神と談判をして居つたものだから、つひ時の經つのも忘れてゐた。併し初稚姫が聞いてゐやせなんだか知らぬて、何だか氣掛りでならないワ』

と云ひながら、サツト障子をあけて長廊下を眺めた。初稚姫は芒の枯れた穗を一つかみ握りながら、他愛もなく遊び戯れ、廊下に一本々々さして遊んでゐる。その無邪氣な光景を眺めて、高姫はホツと一息し、

『何とマア無邪氣な娘だこと、枯尾花を板の間の隙間に立て並べて遊んでゐるのだもの。大きな圖体をしながら、そして十七にもなりながら、未通こい娘だなア。本當に水晶魂だこの高姫がうまく仕込んでやれば、完全に改惡して立派なウラナイ教の宣傳使になるだらう。何と云つても李助さまと云ふ父親を掌中に握つてゐるのだから大丈夫だ。東助さまに肱鐵をかまされ、大勢の前で耻をかゝされて、悔し殘念さをこばつて、此處まで來て見れば、こんな都合の好いことが出來て來た。あゝあ、人間萬事塞翁の馬の糞とやら、苦しい後には樂しみがあり、樂しみの後には苦しみが來るぞよ、改心なされよ……と男子樣のお筆先にチヤンと出て居る。高姫もまだ天連が盡きないと……あ……見えるワイ、エツヘヘ、

、、變性男子樣、大國治立命樣、守り給へ幸へ給へ』

『オッホッホ、、、オイ肉体、大變な元氣だなア、甘く行きさうだのう。吾々一團体の兜靈連中も滿足してゐる。ごうだ、チッと歌でもうたつたら面白からうに……のう』

『コリヤ、何と云ふ不心得なことをいふか。世界は暗雲になり、殆ど泥海のやうになつてゐるのに、そんな陽氣なことで、ごうして誠が貫けるか。變性男子樣のお筆先を何と心得てゐる、チッと改心したがよからうぞ』

『アハ、、、、善惡不二、正邪一如といふ甘い筆法だなア。一枚の紙にも裏表のあるものだから……』

『シーッ、今そこへ初稚姫が出て來るぢやないか、チッと心得ないか』

『聲がせないと、チッとも姿が見えぬものだから、これはエライ不調法を致しました。オ、怖は〳〵、肉体の權幕には俺も往生致したワイ』

初稚姫は何氣なき態を裝ひ、ニコ〳〵しながら出で來り、

『お母アさま、こう〳〵スマートをぼつ歸して來ましたよ。妙な犬でしてね、何程追つかけても後へ歸つて來て仕方がありませぬので、私も困りましたよ』

『あゝさうだろ〳〵、あれだけお前につき纏うて居つたのだから、離れともなかつたさうう。何と云つても畜生だから人間の云ふこた分らず、嘸お骨折だつたろ。併しマアよう歸にましたなア』

『ハイ、仕方がないので、石を拾つて五つ六つ頭にかちつけてやりましたの。そしたら頭が二つにポカンと割れて大變な血を出し、脈らしい聲を出して逃げて歸りましたの』

『それは本當に、氣味のよいこと……ウン、オットドッコイ、氣味の惡いことだつたね、

大變にお前を恨んで居つただらうなア』

『何程ウラナイ教だこて、怨みも致しますまい、ホヽヽ』

『や、初稚さま、お前は今ウラナイ教こ言ひましたね、誰にそんなここをお聞きになつたのだえ』

『お母アさま、表はね、三五教で、其内實は、お母アさまのお開き遊ばしたウラナイ教の方が良いぢやありませぬか。私、ウラナイ教が大好きのよ』

『オホヽヽヽ、ヤツパリお前は私の大事の子だ、何こ賢い者だなア。これでこそ三五教崩壞の……ウン……トコドツコイ、決界の危急を完全に救濟するここが出來ませうぞや』

『さうですなア。誠さへ立てば、名は何うでもいゝぢやありませぬか』

高姫は首を頻りにシヤクリながら、笑を滿面に湛へて、

『コレ初稚さま、お母アさまは、これからお父さまをお迎へ申してくるから、お前さまは暫く事務所へでも行つて遊んで來て下さい。こんな所に一人置いこくのも氣の毒だからなア』

『お母アさま、そんなに永く時間がかゝるのですか』

『さう永くもかゝらない積だが、何こ云つてもあの通り、云ひかけたら後へ引かぬ杢助さまだから、犬を歸なしたここから、其外お前さまの腹の底を、トツクリこ御得心なさるやうに申上げねばならぬから、チツこばかり暇が要るかも知れませぬからなア』

『お母アさま、私もお供致しませうか』

『イヤ／＼それには及びませぬ。又杢助樣に、ごんな御意見があるか知れませぬから、却つてお前さまが側にゐない方が、双方の爲に都合がいゝかも知れませぬ。一寸其處まで行

つて參ります』

こイソ〳〵こして出でて行く。後見送つて初稚姫はニッコこ笑ひ、イソ〳〵こして珍彦の居間を訪ね、同年輩の楓姫こめごけなき話を交換しながら時を移してゐる。

（大正一二・一・二〇　舊一一・一二・四　松村眞澄）

久驗錄　瑞月

甲子舊五月二十三朝　富士山上現三個太陽
中央白光左右圓像赤　次自七月十一至十三
晴空月面有薄蝕天變　古聖相傳曰國家凶兆

（大正一一・一〇・二二）

第六章　玉　葺（一三〇〇）

高姫は祠の森を隈なく探ね廻つた。漸く草むらの中にウン〳〵こ呻きながら眠つてゐる李助の姿を眺め、

『これ、李助樣、サア歸りませう。こんな處に横たはつてゐてお風邪を召したら大變ですよ。サア私こ一緒に歸らうぢやありませぬか』

『さう八釜しう云つてくれな。俺はチッこばかり頭が痛いたのだから、自然のお土に親しんで暫らく此處で休んで歸るから、お前は彼方へ行つて休んだが宜からうぞ』

『これ李助さま、何こ云ふ水臭い事を仰有るのだい。二世を契つた夫婦の仲ぢやありませぬか。夫の難儀は妻の難儀、妻の喜びは夫の喜び、何處までも苦樂を共にしようこ契つた

仲ぢやありませぬか。そんな遠慮はチツとも要りませぬ。さア何卒、私が介抱して上げませう』

『いや何卒構うてくれな、私の體に何卒觸らない樣にして呉れ、賴みだから……』

『これ此方の人、お前さまは私が嫌になつたのだな。女房が夫の體に觸れない道理が何處にありますか。夫の病氣を素知らぬ顏して、女房の身として之が放任して居れますか。此高姫は一旦お前さまと夫婦の約束をした上は、假令此肉体が粉にならうと、何處までも貞節を盡さねばなりませぬ。そんな水臭い事を仰有るものぢやムりませぬぞや』

『ヤー、決して俺が斯う云つたとて、氣を惡うしておくれな。又お前が決して嫌だと云ふのでも何でもない。さア何卒早く館へ歸つて、萬事萬端氣を付けてくれ』

『それだと云つて、之を見捨てゝ何ぼ氣强い私でも歸られませうか。何なら羅重身倒でも探して來ませうか』

『いや、何にも要らない。そんな結構な物を頂くと、却つて神罰が當るかも知れない。私がかうして怪我をしたのも、全く神樣の見せしめだ。神樣がお許し下さらば、屹度直して下さるだらう。何程人間が藻掻いた處で仕方がないからのう』

『それなら、天津祝詞を奏上して上げませうか』

『いや、それには及ばぬ。斯うなり行くのも神樣の御都合だ。祝詞なんか奏上ては、却つて畏れ多い。何卒賴みだから、館へ歸つてお前は御用をしてくれ。それが何よりの功德だ。さうすれば、私の怪我もすぐ癒るだらう』

『それなら、鎭魂をして上げませうか。……一二三四……』

と云ひかけると杢助は慌てゝ押止め、苦しさうな聲を出して、

『高姫、それに及ばぬ。そんな勿体ない事は云はぬやうにして呉れ。却つて私は苦しいから』

『それなら、初稚姫さまを呼んで來ませうか。そして介抱をさせたら貴方の氣に入るでせう。到底私の樣な婆アの介抱では、病氣がまます〳〵重くなりませうからな』

と稍嫉み氣味になつて言葉を尖らし始めた。

此杢助は、その實ハルナの都の大雲山に蟠居せる八岐大蛇の片腕と聞えたる肉体を有する兇靈で、獅子虎兩性の妖怪であり、其名を妖幻坊と云ふ大怪物である。妖幻坊はスマートに眉間を嚙みつかれ、こゝに大苦悶を續けてゐたのである。されど高姫に其正体を看破られむことを恐れて、一時も早く高姫の此處を立去らむ事をのみ望んでゐた。されど高姫は何處までも大切の夫の介抱をせなくてはならぬと思ひつめ、少しも其處を動かうとはせない。妖幻坊の杢助は人間の形体を負傷の身を以て保持してゐるのは非常な苦痛である。ウツカリすると其正体が現はれさうになつて來たので、聲を勵まし稍尖り聲で、

『これ、高姫、何故そなたは夫の申す事を聞いてくれないのか。お前も高姫と云つて隨分剛の者ぢやないか。夫の病氣に心をひかれて、肝腎の神樣の御用を次ぎに致さうとするのか。そんな不心得のお前なら、もう是非がない。緣を切るから、其方へ行つてくれ』

『杢助さま、お前さまは頭を打つてチツと逆上せてゐるのだらう。さうでなければ、そんな水臭いことを仰有る筈がない。あゝ氣の毒な事だな。あゝ惟神靈幸倍坐世』

『こりや高姫、私は最前も云うた通り神樣の戒めにあつて居るのだから、そんな事は何卒云つてくれなと云つたぢやないか。何故夫の言葉をお前は用ひないのか』

『よう、そんな事を仰有いますな。初稚姫があれだけ大切にしてゐたスマートを私がお父

さまの命令だからと云つて千言萬語を費し說きつけた處、初稚は到頭私の言ひ條についてスマートに大きな石を五つもかちつけ、頭蓋骨を割り、大變な血を出したので、スマートは、あた氣味のよい、キヤン〳〵と悲鳴をあげて逃げて了ひましたよ。大方今頃は河鹿峠の懷谷近邊で倒れて死んで了つてゐるに違ひありませぬ』

『何、スマートに石をかちつけて初稚姫が歸なしたと云ふのか。ヤー、それは結構だ。持つべきものは子なりけりだな』

『そら、さうでせう。お前さまの目の中へ這入つても痛くないお孃さまですからな。持つべからざるは女房なりけりと云ふお前さまは水臭い了簡でせうがな』

『もう頭の痛いのにクド〳〵とそんな事は云つてくれな。又痛みが止まつてから不足なり何なりと承はらう。それよりも早く宅へ歸つて初稚姫を呼んで來てくれ。そしてお前は人知れず受付の前にある大杉の木へ上つて玉茸と云ふ茸があるから、それをむしつて來てくれないか。それさへあれば私の病氣は一遍に治るのだ』

『それなら、ハルかイルに梯子でもかけて取らせませうかな』

『いや〳〵、これは秘密にせなくては効能が現はれぬのだ。假令娘の初稚姫にだつて覺られちや無効だぞ。兎に角、初稚姫を呼んで來るよりも、お前が早く其玉茸をソツと取つて來てくれないか。夫が女房に手を合して賴むのだから……』

と涙を兩眼に垂らして高姫を拜み倒した。高姫はオロ〳〵しながら兩眼に涙を浮べ、

『これ、李助さま、夫が女房に手を合して賴む人が何處の世界にありますかいな。それなら之から玉茸をこつて參ります。何卒暫く此處に待つて居て下さい。苦しいでせうけれどな』

『それは御苦勞だ。何卒怪我をせない樣に、そして人に見付からぬ樣に採つて來て下さいそれ迄は初稚姫にも何人にも云つてはいけませぬぞ』

『ハイ、何も彼も呑込んで居ります。それなら之から取つて來て上げませう。暫く此處に……ネー李助さま、貴方も摩利支天樣の御身魂だから、之位の傷にはメッタに往生なさる事はありますまいからな』

『うん、さうだ、大丈夫だよ。お前も夫に對する初めての貞節だから、何卒怪我をせない樣にして玉茸の採取を賴むよ』

『ハイ、承知致しました』

と大きな尻をブリン〳〵と振りながら、李助の倒れて居る姿を見返り〳〵、チョコ〳〵走りに受付の前の大杉の木の蔭にソッと身を寄せた。李助に變化してゐた妖幻坊はヤッと一安心して元の怪物と還元し、一先づ此處を立去らねば、又も人に見付けられては堪へ難き苦痛だと、谷の流れを傳うてガサリ〳〵と山の尾の上を渡り、向ふ側の日當りのよき窪んだ處に横たはり、四邊に人なきを幸ひ、ウーン〳〵と呻き苦しんでゐたのである。

扨て一方の高姫は、森の木蔭に身を忍び、受付の樣子を考へてゐると、イルとハルとが火鉢を眞中に圍み、何事か「アッハッハ、、、〳〵」と笑ひながら雪駄直しが大仕事を受取つた樣な態度で、何時動かうともしない。高姫は氣が氣でならず、

『早く兩人何處かへ行つてくれたらよいがな。氣の利かぬ奴ばつかりだ。早く玉茸を取つて李助さまに上げなくちや、あの鹽梅では大變傷が深いから本復せぬかも知れない。でも彼奴等に見られちや藥が利かぬのだし、エーぢれつたいことだなア』

と森蔭に地團駄を踏んでゐる。ハル、イルはそんな事も知らず何事か笑ひ興じてゐる。高姫も

耳をすまして此話を聞くより外に取る術はなかつた。大杉の一方に姿の見えない樣に身をかくし聞いて見れば、イルは、

『如何も怪しいものぢやないか。エー、杢助さまだつて耳がペラ〳〵と動くなり、又今度來た初稚姫さまは何うも一通りの人ぢやない樣だし、楓姫さまが素敵な美人だと思つてゐたのに、これは又幾層倍とも知れないナイスぢやないか』

ハルは、

『ウン、さうだな。俺等も男と生れた以上は、あんなナイスと假令一夜でもいゝから添うて見たいものだな。然し初稚姫さまだつて楓姫さまだつて、何れ養子を貰はねばならぬのだから、滿更目的の外れる事もあるまい。あんな人になると却つて器量を好まぬものだ。口許のしまつた色の淺黑い男らしい男を好むものだよ。貴樣だつて、俺だつて軍人教育を受けてゐるのだから、何處ともなしに軍人氣質が殘つて凜々しい處があるなり、一つ体を動かすにも廻れ右、一二三式なり、本當に女の好きさうな男だからな』

『うん、そらさうだ。貴樣だつてあまり捨てた男前でもなし、俺だつてさう掃溜に捨てた樣な男前でもなし、婿の候補者には最も適當だ。さうして宗教の變つたものと結婚すれば互に其信仰を異にするが故に、如何しても家庭の圓滿を缺くと云ふ點から、三五教の信者は三五教の信者と結婚する事になつてゐる。死んでからでも同じ團体の天國へ行かうと思へば、同じ思想、信仰を持つて居なくちや駄目だからな。それ位の事はあんな人になればよく承知してゐるよ』

『エッヘ、、、、中々以て前途有望だ。これだから三五教は結構だと云ふのだ。何と云つても齋苑の館の素盞嗚尊はイドムの神といつて緣結びの神樣だからな。そして金勝要神

と云ふ頗る融通の利く粋な神様があつて「添ひたい縁なら添はしてやらう、切りたい縁なら切つてもやるぞよ」とそれは〳〵中々話せる神さまだから、俺等には持つて來いだよ』

『それはさうと、イク、サール、テル等が競爭場裡に立つて中原の鹿を追ふ樣な事はあるまいかな』

『そりや大丈夫だよ。あんなシャツ面した氣の利かない頓馬が、如何して二人のナイスのお氣に入るものかね。そんな事ア到底駄目だよ。マア安心したがよからう』

『さうお前の樣に樂觀して自惚れてゐる譯にも行くまいぞ』

『何さ、そんな心配は要らぬ。チヤーンと運命が決つてゐるのだ。初稚姫樣があの凛々しい犬をつれてムつた時、僕の面をチラツと見てニタツと笑つて居られた。その時は情味津々として溢るゝ許りだつたよ。そしてあの涼しい目からピカ〳〵ッと電波を送られた時の美しさと云つたら、まるでエンゼルの樣だつたよ。あの目付から考へても、屹度俺に思召があると云ふ事は動かぬ事實だ。アーア、併しながら氣の揉める事だわい』

『こりや、貴樣、そんな甘い事があるかい。俺は初稚姫さまぢやなけりや、どんな女房だつて持たないのだ。貴樣は楓姫さまが合うたり叶うたりだ。楓姫さまは何時もお前の事を「何と男らしい方だね」と云つてムつたぞ。それに決めておけ』

『馬鹿を云ふない。先取權は俺にあるのだ。そんな虫のいゝ事は云つてくれなよ』

『馬鹿にするない。屹度俺が初稚姫さまを此方へ靡かして見せようぞ』

『何、俺が見ん事、靡かしてお目にかけよう』

なぞと何時迄も限りなしに、こんな空想談に耽つてゐる。高姫は氣も狂亂せむばかり苛だてども、何時迄待つても動く氣遣ひはなし、二人の話は益々佳境に入り、日が暮れても夜通しして

も容易に動かぬ樣子である。高姫は是非なく裏口にまはり、普請に使つた梯子を引張り出し來り、大杉の受付から見えない方面に立てかけ、太い體をシワ〳〵と梯子を弓の如くしわませながら漸く一の枝へとりつき、蜘蛛の巣にひつかゝりながら、李助の云つた玉茸は何處にあるかと探しまはつた。されど茸らしいものは少しも見當らない。李助さまが確に此杉だと云つたのだから、何處かにあるだらうと可成く音のせぬやう、枝から枝へ傳ひ上つて行くと、晝目の見えない梟鳥が丸い目を剝いてとまつてゐた。高姫はあまり慌てゝゐるので、視覺に變調を來して居たと見え、梟の兩眼を見て、

『ほんに玉の樣に丸い茸だ。成程玉茸とはよく云つたものだ』

と小さい聲で囁き乍ら梟の目を一寸撫でた。梟は驚いて無性矢鱈に高姫の光つた目を敵と看做し、尖つた嘴でこついたから堪らない、高姫は「ズ、、、ドスン、キヤツ、イ、、、痛い」と小聲に叫んだ。されどイル、ハルの兩人は勝手な話に現を抜かし、女房の選擇談に火花を散らしてゐたから、杉の大木の根元に落ちて苦しんでゐる高姫の體が目につかなかつたのである祠の森の村烏は俄に何物に驚いたか、ガア〳〵と緣起の惡さうな聲をして中空を鳴きながら翱翔してゐる。

（大正一二・一・二〇　舊一一・一二・四　北村隆光錄）

儘ならぬ身を横たへて待ち佗びぬ
晴れて輝く月日の空を

第七章　負傷々々（一三〇一）

初稚姫は靜に歩を運びながら珍彦の館を訪ひ、門口の戸をそつと開き、

『御免なさいまし、私は初稚姫でムいます。ハルナの都へ宣傳使として參ります途中、大神様に參拜を致し、高姫様のお世話になりまして、此處に暫く足を留めて居るものでムいますれば、何卒御入魂に願ひます』

と云つた。此聲に驚いて楓姫は襖をそつと開いて現はれ來り、叮嚀に辭儀をしながら桐の火鉢を据ゑ、座蒲團を敷いて、

『貴女様が驍名高き初稚姫の宣傳使さまでムいましたか。それは〳〵ようまアお訪ね下さいました。實の所は貴女様がお越し遊ばしたと云ふ事を承はりまして、一度拜顏を得たいと願つて居りましたが、私の兩親が申しますには「お前のやうな教育のない不作法者がエンゼルのやうな方の前に出るものぢやない、御無禮になるから控へて居れ」と申しますので、つひ失禮を致して居りました。ようまア尊き御身をもつてお訪ね下さいましたねえサアどうぞ、此處へお上り下さいませ。お茶なりと汲まして頂きます』

『ハイ、御親切に有難うムります。何彼とお世話に預かりましてなア。時に珍彦様、靜子様はどちらにお出でになりましたか、お顏が見えないやうでムいますなア』

『ハイ、一寸兩親は神様へお禮參りと云つて出て往きました。大方御神前に參つて居られませう』

『神丹のお禮を申しにお出でになつたのでせう』

楓姫は此言葉に吃驚して、初稚姫の顏を見上げながら、少しく手を慄はせ、

『貴女はまア、どうしてそんな詳しい事を御存じでムいますか』

『ハイ、御夫婦の危難を見るに見兼ねて、妾が言靈別命様のお告により、神丹と云ふ靈藥を造り、スマートに持たせて貴女のお手に渡した筈でムいますから』

『あゝ、左樣でムいましたか。さうすると貴女樣は、文珠菩薩樣でムいますか、あゝ尊や有難やなア』

と感謝の涙に咽ぶ。いつの間にやらスマートは床の下を潜り、尾をふりながら此處に現はれて來た。

『これスマートや、うつかり出歩いちやいけませぬよ。何うして此處へお出でたの。お前は本當に靈獸だねえ、私の云ふ事をよく聞いて、御夫婦の危難をよく救うて下さつた。ほんとにスマートの名に背かぬ敏捷なものだねえ』

と讃美へて居る。スマートは嬉しさうに躰や尾をふつて居る。楓は漸うに顏を上げ、スマートの姿を見て二度吃驚し、

『アー、昨夜文珠菩薩樣がお連れ遊ばした犬は、これでムいますわ、この犬の口から私の手へ神丹を三粒渡して呉れました。さうして文珠菩薩樣は私に神丹を授けて直樣犬を引き連れ、どこかへお歸りになつたと思へば夢は醒め、堅く握つて居た手を開いて見ればあの神丹がムいました。貴女は全く生神樣、私がかうしてお側へおいて頂くのも恐れ多い事でムいます。さうして私が何うしても合點が參りませぬ事が一つムいます、貴女は何故高姫さまのやうな餘りよくないお方のお子さまになられましたのか』

初稚姫はニツコと笑ひ、

『ハイ、いづれお分りになる事がムいませう』

と云つたきり答へなかつた。楓は疊みかけて又問うた。

『貴女樣は承はれば、李助樣のお娘子樣でムいますさうですねえ』

『ハイ左樣でムいます。併し此處の李助さまは……』

と云つたきり、口をつぐんで仕舞つた。楓は鋭敏の頭腦の持主であるから、早くも意中を悟つた。さうして小聲になり、

『本當に何ですねえ、何も云はない方が無難でよろしいわねえ』

と以心傳心的に、目と目で話の交換を簡單に濟まして了つた。

かゝる所へ珍彦夫婦は藜の杖をつきながら拜禮を終り、裏口から歸つて來た。其足音を早くも悟つて楓は裏口の戸をあけ、嬉しさうな聲で、

『お父さま、お母さま、お歸りなさいませ。夜前の神樣がお越し遊ばしたのよ。あの神丹を下さつた文珠菩薩樣が』

と小聲に囁いた。

珍彦『何、文珠菩薩樣が此處へお出で遊ばしたの。それは直樣お禮を申上げねばなるまい』

靜子『餘り惡魔が蔓るので、この聖場に居ながらも、夜の目も碌に眠られなかつた。あゝ有難い、文珠菩薩樣がお越し下さつたか』

と早くも涙聲になつて居る。楓の後に從いて夫婦は座敷に上り、初稚姫の前に頭を下げ、歔欷泣きしながら、一言も發し得ず感謝の涙に暮れて居る。

『もし珍彦樣、靜子樣、日々御神務御苦勞樣でムいますなア。妾は初稚姫の宣傳使でムいます。突然參りましてお邪魔を致して居ります。楓樣が親切に仰有つて下さるので、つひ長居を致しました』

と、鈴のやうな柔しい聲で挨拶をした。珍彦はハッと頭を上げ、初稚姫の靈氣に滿てる其容貌に感じ入り、

『貴女は文珠菩薩の御化身樣、よくまア お助けに來て下さいました。これ靜子、早く御禮を申さないか』

『初稚姫樣、文珠菩薩樣の御化身樣、よくまア お助け下さいました。この御恩は決して忘れは致しませぬ』

とハンケチに霑んだ目を拭ふ。

初稚姫は迷惑な顏をして細い手を左右に振りながら、

『イエ〳〵お禮を云はれては濟みませぬ。妾の立場がムいませぬ。實は言靈別の神樣が妾に御命令遊ばしたのでムいますよ。ごうぞ大神樣にお禮を申して下さい。妾は決して貴方等をお助けするやうな力はムいませぬ』

『なんと御謙遜な貴女樣、實に感じ入りました。時に初稚姫樣は、昨日見えました杢助樣の御令嬢と承はりましたが、左樣でムいますかなア』

『イエ……ハイ』

と煮え切らぬ返事をして居る。

楓は兩親に向ひ、

『お父さま、お母さま、そんな失禮な事を仰有つてはいけませぬよ。何、あんな方が姫樣のお父さまであつて耐りませうっ これには深い譯がおありなさるのでムいますよ。併しながら、これきりで何も仰有らないやうにして下さい。姫樣の御迷惑になつては濟みませぬからなア』

珍彦夫婦は楓の言葉に打ち首肯き、

『ウン〳〵、成程々々、いや解りました。御苦勞樣でムいます。ごうぞ貴女の御神力魔をお取り拂ひ下さるやうにお願ひ申します』

と夫婦は手を合せ、又もや伏し拜むのであつた。

楓『餘り斯樣なお話は、誰が聞くか分りませぬから、ちつとハンナリと歌でも歌ひませうかねえ』

『さうですね、楓さま、一つ歌つて下さいな』

楓は初稚姫の言葉をいなみ兼ね……お耻かしながら……と前置きして、

『人の心の底深く
千尋の浪を分け往けば
見る目たなびく岩蔭に
醜き鰐の住めるかな』

初稚姫は幾度も諾きながら、にやりと笑ひ、

『成程ねえ。よく出來ましたよ。妾も腰折を讀まして頂きませうかねえ。ホ、、』

と笑ひながら、

『木の花一度に咲き滿つる
天津御國へ誘ひて
常住不斷の法樂を
與へたまはる瑞御靈
誠にお耻かしい事でムいます。ホ、、、』

と梅花の露に綻ぶ如き小さい唇から笑を漏らして居る。

此時門口に男の聲として、

『〇〇戀しや春の夜の
闇に立ちたる面影は
消えてあとなく吾聲の
唯木靈する淋しさよ』

と歌つて通るものがあつた。又かはつた男の聲で、

『樂しからずや戀の夢
唯力なく君が手に
抱かるゝ時吾涙

ほゝ笑む眼をぬらすかな

〇

神の光に包まるゝ
尊き君を偲びつゝ
吾等の戀に幸あれと
涙流して祈るかな

〇

悲しき夢のさめし時
涙にしめる目をあげて
獨り寢る夜の淋しさを

神の御前にかきくごく』

と歌ひながら珍彦館の門口を通り、神殿の方へ足音が消えて往く。楓は、

『何とまア誰か知りませぬが、調のよい歌ですこと、ねえ初稚姫さま』

『ほんにさうですねえ。私なんかの歌から見れば、比べものになりませぬわ。このお館には風雅人が澤山居られると見えますなア』

と斯く話す時、又もや聞ゆる歌の聲、

『櫻の花咲く春の野に
君とまみゆる嬉しさよ
○
祠の森にます神の
守らせ給ふ戀の幸
○
戀しき人を待ち暮らす
男心の淋しさを
知るや知らずや東雲の
光はさしぬほの〴〵と』

初稚『何とまア情緒の深い風流な歌ですなア』

珍彦『姫樣は申すに及ばず、楓其方も氣をつけなくてはなりますまい。きつと貴女方二人に心を寄せて居る男があるのでせうよ。何と云つても花の莟の姫樣又楓姫、美しい花には害蟲のつき纏ふものですからなア』

『仰の通りでムいます。妾もあの歌によつて、吾身邊に容易ならざる戀の魔の付纏うて居る事を悟りました。併しながら決して御心配下さいますな。左樣な事に心を動かすやうな私ではムいませぬ。楓さま、貴女も大丈夫でせう』

『姫樣のお言葉の通り、妾は何處までも注意を致して居ります。何分お父さまやお母さまが、若い娘をもつて居ると云うて非常に心配をして下さるのですもの、有難迷惑を感じます、ホ、、、、』

珍彦『それはさうだらうが、あの高姫さまだつて、あれだけ歳が寄つてから、コテ〳〵と白粉をつけたり白髪を染めたり、日に何度も着物を着かへた揚句、李助さまとやらを喰へこんで、夫婦氣取で浮かれてゐらつしやるのですもの。若い娘をもつた親はどれだけ氣が揉めるか知れたものぢやありませぬ。これ楓、姫樣の樣なお方なれば大磐石だが、お前はまだ神樣の事がよく分らないのだから、兩親が心配するのも無理ではありませぬよ、アハ、、、、』

『あのまアお父さまとしたことわいのう。それ程私に信用が置けませぬか。私だつて道晴別の妹、祠の森の神司珍彦の娘でムいます。必ず〳〵お心を惱ませ下さいますな。きつと神樣のお名を汚したり、親兄弟の御面を汚すやうなことは致しませぬ。ねえ姫樣、貴女私の心をよく御存じでせう』

『御夫婦樣、必ず御心配なさいますな。楓樣は、本當に見上げたお方でムいますよ。きつと妾が保證致します。如何なる魔がさしましても神樣がお守り下さる上は、楓樣のお心が極めて堅實に居られますから、何程仇し男が云ひ寄りましても、楓さまに取つては鎧袖一觸の感もありませぬ。ごうぞお心を惱めないやうにして御神務にお盡し下さいませ』

珍彦『ハイ有難う、ようまア云つて下さいました』

靜子『そのお言葉を承はり、私も安心を致しました。あゝ惟神靈幸倍坐世』

と合掌する。

斯く話す折しも、又もや門口に戀の擒となりし人の歌ふ聲、隔ての戸をすかして聞え來る。

『ひそ〳〵と銀の雨
絶間もなしに降りそゝぐ
うらぶれし叢のなげかひ
あゝかゝる日は
一入痛みも出づれ
毒の爪をもて
永久に癒え難く
刻りつけられし
胸の痛手よ』

と哀れな聲調で聞えて來る。又續いて、

『靜に〳〵瞳をつぶつて
目にも見えない或物を
見る時吾は銀色の
夢の中にぞ浸り入る
素裸體の人間は
温かい暖かい
負傷々々

桃色の雰圍氣に包まれながら
歌ひつゝ踊る
心を蕩かすやうな
メロディーが流れ
總てのものが
やすらかに息づく
吾は夢のために働き
夢によつて働く
そして又
夢によつて、はぐくまれてゆく』

斯る所へ慌しくやつて來たのは、受付のイル、ハルの兩人であつた。遠慮會釋もなく門口の戸を押し開き、

イル『もし珍彥樣、大變な事が出來ました。ごうぞ來て下さい、タヽ大變でムいます』

『慌しき其言葉、大變とは何でムるかな』

ハル『ハイ、タヽ、高姫樣が大變な事でムいます。ごうぞ來て下さい。到底私等の挺には合ひませぬから』

靜子『何か高姫樣が御機嫌でも損ねて御立腹してムるのかな』

初稚姫は、

『イエ〳〵さうぢやムいませぬ。玉茸を取らむとして梟鳥に目をつかれ、大杉の梢から顚落遊ばし、腰の骨を些し挫かれたのでせう。決して御心配なさいますな、直に癒りま

せうから』

イル『もし〳〵初稚姫様、貴女そんな平氣な顔してよう居られますなあ。義理あるお母さまぢやありませぬか、サア早くお出でなさいませ。お父さまはお怪我をなさるなり、お母さまは木から落ちて苦しんでムるなり、何ごころぢやありますまい』

『ハイ直に參りますから、お母さまにさう仰有つて下さい。これスマートや、早く何處かへお隱れ』

と云ひながら、初稚姫は倉皇として高姫の危難を救ふべく館を立ち出で、大杉の許へと歩を急いだ。高姫は苦しげな息をつきながら、

『ア、、其方は初稚だつたか、よう來て下さつた。お母さまは、つひお父さまの病氣を直したいばかりに、玉茸を取りに登つてこんな目に遇つたのだよ。お父さまは誰にも知れないやうにして取つて呉れと仰有つたのだが、こんな不調法をして人に見付けられたから、もう利かう筈がない。ごうぞ私には構はず、あの森の木の下にゐらつしやるのだから、早く行つて介抱して上げて下さい。私は日出神の御守護があるから心配は要りませぬ。サア早く往つて上げて下さい、氣が氣ぢやありませぬから』

『さうだと云つてお母さまの危難を見捨てゝ、これがごうして往けませうか。一旦親子の緣を結んだ上からは、そんな水臭い事を仰有らずに、ごうぞ介抱さして下さい、これが貴女に對する孝行のし初めですから』

と、高姫が妖幻坊に云つた言葉其儘を應用して居る。

『エイ、お前は親の云ふ事を聞かないのかい、さうであらう。お腹を痛めた子でないから恩も義理もありませぬわい。聞いて下さらないのも仕方がありませぬ。もう諦めます』

『お母さま、それでは濟みませぬが、お父さまの介抱に參ります。不孝の奴とお卑みなきやうにお願ひ申します。これ、ハルさま、イルさま、どうぞお母さまの介抱を賴みますよお母さま左樣なら』

と云ひながら此場を立ち去つた。高姫は相變らず苦悶の息を漏らして居る。

（大正一二・一・二〇　舊一一・一二・四　加藤明子錄）

豫ねてより斯くと知りつゝ、夜な〳〵に
世の行く末を今更なげくも

瑞月

第八章　常世闇（一三〇二）

大抵の人間は高天原に向つて其内分が完全に開けてゐない。それ故に大神は精靈を經て人間を統制し給ふのが普通である。何となれば、人間は自然愛と地獄愛とより生み出す所の地獄界の諸々の罪惡の間に生れ出でて、惟神卽ち神的順序に背反せる情態に居るが故である。されど一旦人間と生れた者は、何うしても惟神の順序の内に復活歸正すべき必要がある。而して此復活歸正の道は、間接に精靈を通さなくては到底成就し難いものである。併しながら此物語の主人公たる初稚姫の如き神人ならば、最初より高天原の神的順序に依る所の諸々の善德の中に生れ出でたるが故に、決して精靈を經て復活歸正するの必要はない。神人和合の妙境に達したる場合の人間は、精靈なるものを經て大神の統制し給ふ所とならず、順序卽ち惟神の攝理により

大神の直接内流に統制さるゝのである。

大神より來る直接内流は、神の神的人格より發して人間の意性中に入り、之より其智性に入り、斯くて其善に入り又其善を經て眞に入る。眞に入ることは要するに愛に入ることいふ事である此愛を經て後聖き信に入る。故にこの内流の愛なき信に入り、又善のなき眞に入り、又意思よりせざる所の智性に入ることはないものである。故に初椎姫の如きは清淨無垢の神的人格者とも云ふべき者なれば、その思ふ所、云ふ所、行ふ所は、一として神の大御心に合一せないものはないのである。斯ゝる神人を稱して眞の生神と云ふのである。

天人及び精靈は何故に人間と和合する事斯の如く密接にして、人間に所屬せる一切のものを彼等自身の物の如く思ふ理由は、人間なるものは靈界と現界との和合機關にして頗る密着の間に居り、殆ど兩者を一つの物と看做し得べきが故である。されど現代の人間は高天原より物慾の爲に自然に其内分を閉し、大神のまします高天原と遠く離るゝに至つたが故に、大神は茲に一つの經綸を行はせ給ひ、天人と精靈とをして各個の人間と共に居らしめ給ひ、天人即ち本守護神及び精靈正守護神を經て人間を統制する方法を執らせ給ふ事となつたのである。

高姫の身体に侵入したる精靈、中にも最も兇惡なる彼兇靈は、常に高姫と言語を交換してゐるものゝ、その實高姫が人間なる事を實際に信じてゐないのである。高姫の身体は即ち自分の肉体と固く信じてゐるのである。故に高姫が精靈に對して色々と談判をすると雖も、其實精靈の意思では他に目には見えないけれども、高姫なる精靈があつて、外部より自分に向つて談話の交換をしてゐる樣に思つて居るのである。又精靈の方に於ては、高姫の肉体は決して何も知つて居ない、知つてゐるのは只精靈自身の知識によるものと思ひ、從つて高姫が知つてゐる所の一切の事物は、皆自分の所爲と信じ居るものである。併しながら高姫が餘りに……俺の肉体

にお前は巣喰つて居るのだ……と、精靈に向つて屢〻告ぐるによつて、彼に憑依せる精靈卽ち兒靈は、うす〳〵ながら自分以外に高姫といふ一種異樣の動物の肉体に這入つて居るのではあるまいか……位に感じだしたのである。高姫は又精靈の言ふ所、知る所を、自分の言ふ所、知る所と思惟し、而して精靈が、自分の肉体は神界經綸の因緣のある機關として特別に造られたのだから、正守護神や副守護神が宿を借りに來て居るものと信じて居るのである。而して面白い事には、高姫の体内に居る精靈は、高姫の記憶と想念を基としていろ〳〵と支離滅裂な豫言をしたり、筆先を書いたりしながら、其不合理にして虛僞に充てる事を自覺せず、凡てを善と信じ、眞理と固く信じてゐるのだから、自分が惡神だと云つたり、或は惡を企まうなどと言つてゐながらも、決して眞の惡ではない、實は自分が或自己以外の何物かと揶揄つて居るやうな氣でゐるのだから不思議である。又高姫自身も、少し許り惡の行り方ではあるまいかと思うて見たり、或時は……イヤ〳〵決して自分の思ふ事、行ふ所は微塵も惡がない、只譯の分らぬ人間の目から、神格に充されたる吾々の言行を觀察するのだから惡に見えるだらう。眞の神は必ず自分が神の爲道の爲に千騎一騎の活動してゐる事をキットお褒め遊ばすだらう。神に叶へるものとして、神柱とお使ひ遊ばしてゐられるのであらう。譯の分らぬ現界の人間が、假令惡魔と言はうとも、そんな事は構つてゐられない、吾なす業は神のみぞ知り給ふ……といふ樣な冷靜な態度を構へ、如何なる眞の敎示も、眞理も、自己以外に說くものはない、又行ふ眞の人間もないのだから、至善至愛の標本を天下に示し、千座の置戸を負うて萬民の罪惡を救うてやらねばならぬ。自分は神の遣はし給ふ犧牲者、救世主だと信じて居るのだから始末に了へぬのである。高姫のみならず、世の中に雨後の筍の如く、ムク〳〵と簇生する自稱豫言者、自稱救世主なども、すべては高姫に類したものなることは言ふ迄もない事である。

又動物は精靈界よりする所の一般の内流の統制する所となるものである、蓋し彼等動物の生涯は宇宙本來の順序中に住する者なるが故に、動物はすべて理性を有せないものである。理性なきが故に神的順序に背戻し、又之を破壞することをなし得ないのである。人間と動物の異なる處は此處にあるのである。併しスマートの如き鋭敏なる靈獸は其精靈が殆ど人間の如く、且本來の純朴なる精神に人間と同樣に理性をも有するが故に、よく神人の意思を洞察し、忠僕の如くに仕ふる事を得たのである。動物はすべて人間の有する精靈の内流を受けて活動することがある。されども普通の動物は其靈魂に理性を缺くが故に、初稚姫の如き地上の天人の内流を受くることは出來得ないものである。併し此スマートは肉体は動物なれども、神より特別の方法に依つて、即ち化相の法によつて、初稚姫の身變を守るに必要なるべく現じ給うたからである。初稚姫も此消息をよく感知してゐるから、決して普通の犬として遇せないのである。只神が化相に仍つて、其神格の一部を現はし給ひしものなることを知るが故に、姉妹の如く下僕の如く、或時は朋友の如くに和睦親愛し得るのである。普通の人間が動物と和合した時は、全く畜生道に墮落した場合である。又人間が靈肉脱離の後、地獄界及び精靈界に在る時、現世に在る吾敵人に對し、危害を加へむとするの念慮强き時は、動物の精靈に和合して其怨恨を晴さむとするものである。故に生靈又は死靈に憑依された人間には、必ず動物の靈が相伴うてゐるものである。是は或大病に苦しんでゐる人間を鎭魂し、又は神言を奏上して之を調べる時、必ず人間の生靈又は死靈の姓名を名乘るものである。而して熟練したる審神者が之を嚴しく責立つる時は、遂に人靈と動物靈と和合して其人靈の先驅者となつたことを自白するものである。狐狸や蛇、蟇、犬、猫其他の動物の靈が人間に來る時は、人間の記憶及び想念中に入つて其肉体の口舌を使用し、或は自分が驅使され合一されてゐる人靈の想念をかつて、人間の如く言語を

發するに至るものである。靈界の消息に暗き學者は、狐狸其他の動物が人間に憑つて、人語を用ふるなどはあり得べからざる事である、斯の如き事を信ずる者は太古未開の野蠻人である。斯の如く人文の發達したる現代に於て尙動物が人間に憑依して人語を發するなどの不合理を信ずるは實に癲狂痴呆の極みであると嘲笑するは、現代の半可通的學者の言說である。何ぞ知らむ、彼等こそ靈界より見て實に憐れむべき頑愚者にして、且癲狂者となつてゐるのである。自分の眼が自分で見られ又自分の頭部や頸部、背部などが自身に於て見ることを得ない人間が、何うして靈界の幽玄微妙なる眞理眞相が分るべき道理があらう。須らく人間は神の前に拜跪し其迂愚と不明と驕慢とを鳴謝すべきものである。

○

動物例へば犬、猫、鹿、牛、馬などは、惟神卽ち神的順序に從つて交尾期なども一定し、決して人間の如く、何時なしに發情をするなどの自墮落な事はないものである。又植物なども靈界と自然界の順序に順應して、惟神的に時を定めて花開き實を結び、嫩芽を生じ落葉するものであつて、實に其順序を誤らない事は吾々人間の到底足許へもよれない程、秩序整然たるものである。而して犬は犬、猫は猫、馬は馬と各天稟の特性を發揮し、よく其境遇に適應せる本性を發揮するものである。又植物などは各其特性を備へ、自己特有の甘さ、辛さ、酸さ、苦さ等の本能を發揮し、幾萬年の昔より其味を變へないのである。要するに芋は茄子の味に代る事を得ない、又唐辛は蜜柑の味に決してなるものでない。又同じ畑に植付けられ、同じ地味を吸收しながらも、依然として西瓜は西瓜の味、唐辛は唐辛の味、栗は栗、柿は柿の特有の形体及び味を有つて居るものである。而して、此特有性はすべて靈的より來り、其成長繁茂の度合は自然界の光熱や土地の肥瘦等に依るものである。然るに人間は理性なるものを有するが故に少々

土地が變つた時又は氣候の激變したる土地に移住する時は、忽ち其意思を變移し、十年も外國へ行つて來た者は、其思想全く外人と同樣になつて了ふものである。これが人間と動物又は植物と異なる點である。斯の如く人間は理性によつて自由に思想並に身体の色迄も多少變ずる便宜あると共に、又惡に移り易く墮落し易きものである。故に動物植物に對しては大神は決して教を垂れ給ふ面倒もなく、極めて安心遊ばし給へども、人間は到底動植物の如く神的順序を守らない惡の性を帶びてゐるが故に、特に豫言者を下し、天的順序に從ふ事を教へ給うたのである。併しながら人間に善惡兩方面の世界が開かれてあるが故に、又一方から言へば神の機關たる事が得るのである。願はくは吾々人間は神を愛し神を信じ、而して神に愛せられ、神の生宮として大神の天地創造の御用に立ちたいものである。

却説高姫が玉茸を採らむとしてソツと大杉の枝に登り、梟にクワン〳〵と鋭き嘴にて兩眼をコツかれ、アツと叫んで地上に盲猿の如く顚落し、腰骨を打つて堪へ難き苦痛に呻吟しながら、イル、イク、サールなどに介抱され、漸くにして其居間に運ばれた。されど高姫は元來剛の者なれば少々腰骨の歪んだ位は苦にする樣な女ではなかつた。そして容易に痛いとか苦しいとか云ふ樣な事は、其性質上絶對に口外せない。併しながら兩眼をこつかれ、眼瞼忽ち充血して腫れ塞がり、光明を見る事を得ざるに至りしには、流石の高姫も餘程迷惑をしたのである。

イルは、

『サア、高姫さま、此處が貴女のお居間ですよ。マアゆつくり本復するまでお休みなさいませ。イル、イク、サール、ハル、テルのやうな屈强な男も居りますから、どこ迄もお世話を致します、どうぞ安心して使つて下さいや』

『お前はイルかな、イヤ御親切に有難う。モウ斯うなつては目が腫上つて、一寸も見えな

いのだから、お前等のお世話になるより仕方がない。やがて此腫が引いたら目も見えるだらうから、どうぞすまないが二三日介抱して下さい。あゝあ何こした不仕合せな事だらうなア。折も折こて李助さまは躓いて倒れ、眉間を破つて苦しむでムるなり、其痛みみ直したさに、玉茸を採りに上つて、又もや私は大杉に棲んで居つた天狗の奴に兩眼をコツかれ木からおちた猿のやうなみじめな目に遇ふこは……あゝ神樣も何うしてムつたのだらうかな、義理天上さまも餘りだ……』

こ慨然こして悲痛の涙をこぼしてゐる。

サール『高姫さま、本當に不思議な事ですな。玉國別さまも此河鹿峠で猿の奴に兩眼を破られて、永らく御難儀を遊ばしましたが、到頭御神德を頂いて全快遊ばし、機嫌よく宣傳の旅に出られた後へ貴女がお出でになり、又もや天狗に目をこつかれて同じ眼病に惱むこは、何こいふ不思議な事でムいませう。何か神樣にお氣障でもあるのぢやムいますまいかな』

『あゝさうだなア。玉國別さまこ云ひ、高姫こ云ひ、頭にタの字のつく者は能く目に祟られるこ見える。これから神樣にお詫を申して、一日も早く此目を直して頂かぬ事には、かう世の中が眞黑闇では仕方がない。一時も早く天の岩戸開きをして、元の如く明るい光明世界に捻ぢ直したいものだなア、あゝ惟神靈幸はへませ』

イクは、

『高姫さま、あなた今、暗い世界こ云ひましたね、ソラ貴女の目が塞がつてるからですよ日天樣が皓々こして輝いてゐらつしやるのですから、決して御心配にや及びませぬ。のうハルよ、さうぢやないか』

『ホヽヽヽ、お前も分らぬ男だなア。此世の中が暗がりだこ言つたのは人間の心が眞暗が

りだと云つたのだよ。決して肉体で見る世界が暗ノ・なつたと云ふのぢやない』

『それでも、何ですよ。肉体で見る世界でも、時々眞暗になりますからなア』

『きまつた事だよ。夜になれば眞暗になるのは當前だ、お前も割とは馬鹿だなア』

『何とマア目も見えぬ態をして居つて、剛情な婆アさまだな。まだ悪口をついてゐる。コレ高姫さま、私は夜もある代り、又新しい日天様を毎日拜んで光明世界もありますよ。お前さまはモウ斯うなつちや、常夜行く暗の世界に彷徨うてゐるやうなものだ。夜ばかりだなア』

サールはしたり顔に、

『ソラさうだとも、ヨルの受付を邪魔物扱ひにしてムつたのぢやもの、其報いが忽ち到來して、自分が、ヨルの世界へお這入りなさつたのだ。ごうも自業自得だから仕方がないワ何程お氣の毒でも、吾々が如何ともする譯には行かないワ』

テルは、

『高姫さま、貴女は日出神の義理天上さまが御守護してムるのだから、夜でも決して暗いこたアありますまい。何と云つても義理天上日出神様の生宮だ、つまりいへば日出神御自身だから、見えるでせうなア。今日は殊更に、トコギリ、天上の日出神さまは御機嫌よく嚇々の光明を輝かしてゐられますからなア』

『ソラさうだとも、肉の目が何程ふさがつて居つたとて、日出神の生宮だもの、なん……にもかもよく見えすいてゐるのだ。本當に神様の御神力といふものは偉いものだらう』

テルは、

『高姫さま、そんなら吾々は心配する必要はありませぬな。私は又お目が見えないと思つ

て、何くれとお世話をして上げねばなるまいと思うてるたが、お目が見えるとあらば殊更に氣をつけて、お世話をして上げる必要もムいますまい。おい、イク、イル、ハル、サ！ル、お前等も安心せい。流石は高姫さまだ、目をふさいで居つても、よく見えるといのうイッヒ、、、、』

と小さく笑ひ、腮をしやくり、肩をゆすつて見せる。四人は一度にふき出し、

『ブッブッブックワッハ、、、、』

『これ、お前等は私がこれ程負傷をして困つてゐるのに、それ程面白いのかなア。不人情者奴が。待つてゐなさい、今に初稚姫が歸つて來たら、告げて上げるから……』

テル『オイ、形勢不穩になつて來たぞ。地震雷火の雨の勃發せない間に退却々々、全体進め

一二三』

と云ひながら、ドヤ〳〵と長廊下を傳ひ、受付の方面を指して走り行く。

イルは只一人次の間に身をかくし、高姫の容子を考へて居た。これは決して惡意ではない。もしも高姫が一人で困つた時には助けてやらうといふ親切な考へからであつた。忽ちウーといふ唸り聲が聞えて來た。イルは何物ならむとソッと襖を開けて高姫の居間を覗き込んだ。ごこから來たか締め切つてある座敷へ、スマートがヌッと現はれ、高姫の前三尺許り隔てゝ、チョコナンと坐つてゐる。カラコロと下駄の足音が近づいて來る。これは云ふ迄もなく初稚姫が森林内を暫く逍遙して歸つて來たのである。初稚姫は元より李助の妖幻坊なることを知つてゐたから、高姫の依頼によつて、正直に李助を探しに行くやうな馬鹿ではない。されど高姫の氣休めの爲に暫くの間、森林内を逍遙して歸つて來たのである。

（大正一二・一・二一　舊一一・一二・五　松村眞澄錄）

第九章　眞理方便（一三〇三）

高姫は初稚姫の歸り來る足音を聞き付け、待ち遠しげに、

『初稚さま…ではないかな』

初稚姫は、

『ハイ』

と答へ、スツと障子をあけ、見れば高姫は顏面全部、干瓢の樣にふくれ上り、どこが目だか鼻だか判別し難き迄に相好變じ、丸つきり妖怪の如くであつた。而して腫れた目は額の方に轉宅し、鼻は無遠慮に靈衣の外に突出し、恰も雲を帶にした山容の正しからざる高山のやうに見えてゐる。唇は夜着の裾のやうに厚くふくれ上り、半ば爛熟した熟柿の樣に薄つぺらい皮膚が

脈らしう、赤く且紫を帶びて隘かに光つてゐる。初稚姫はハツと驚き、早速に言葉も出なかつた。而して心に思ふ樣……あゝ何とした恐ろしい顏だらう、丸で地獄に棲んでゐる怪物の樣だ。高姫さまの內的生涯の發露かも分らない。否々これが事實だ、ホンに不愍なものだなア。何とかして早く助けて上げねばならないが、何と云つても罪業の深い方だから……と心に囁きながら、キチンと足駄を上り口に向ふむけに揃へて、ハンケチにてポン〳〵と塵うち拂ひ、靜に高姫の側に寄り添ひながら、さも同情ある聲にて、

『お母さま、大變なお怪我をなさいましたね、私が力一杯介抱をさして頂きますから、何卒御安心して下さいませ』

と云ひつゝ、何時の間に來たのかと訝かりながら、スマートの頭を撫でてゐる。スマートは嬉しげに、尾を打振り、座敷をキリ〳〵と廻り始めた。

高姫は歪んだ口の横の方から、半ば破損した鞴のやうな鼻聲交りの聲で、

『ハイ御親切に有難うムいます。そして李助さまはまだ歸つてムらぬかな。御病氣の具合はチッと宜しいかな。折も折とて二人の親が、一時に此通り大怪我をしたのだから、お前もさぞ心配だらう、偉いお骨を折らします』

初稚姫は、李助が居なかつたと言へば、高姫が大變に失望落膽するだらう、目が見えないのを幸ひ、こゝは何とか氣休めを言つておかねばなるまいと決心し、

『ハイ、お父さまは谷川の側に休んでゐられましたが、私がそこへ參りまして…お父さま〳〵…と聲をかけようとすれば、ムックと起上り、さも愉快相な顏をして、…あゝお前は初稚姫か、ようマア來てくれた。わしは思はぬ怪我をして、こんな不細工な顏をお前に見らるゝのは、親として本當に耻かしい。顏は瓢のやうにふくれ上り、目鼻口の位置も、俄の地異轉變で生れてから行つた事もない地方へ轉宅し、口も鼻も殆ど塞がつてかやうな鼻聲より出はせぬが、併しながらようマア來て下さつた…と親が子に手を合して拜むのですよ』

『あゝさうだつたかな、それは何よりも結構なことだ。李助さまも餘り我が强いので、見せしめの爲に神界から怪我をさせなさつたのだろ。これでチッとは優しうお成りなさるだらうから、夫婦が病氣全快の上は屠一屠御神業に、家内和合して盡すことが出來るでせうあゝ惟神霊幸倍坐世』

『お母さま、お鹽梅はどうでムいますか、御氣分に障るでせうな』

『ナアニこれしきの怪我に氣分が悪いの、何うのと云ふやうなことではないが、チッと許り目が見えにくいので、不便を感ずること一通りでムいませぬ。併しながら神樣のお蔭で

ホンノリこそこらが見えるやうだ。此鹽梅なれば、やがて全快するでせう』

『ごうぞ、何でも早く癒つて頂きたいものでムいますな、何こいふ私は運の悪いものでせう。お父さまこいひ、折角仁慈深きお母さまが出來て、ヤレ嬉しやこ喜ぶ間もなく、かやうなキツイお怪我を遊ばし、これが何うして忍ばれませうか。身も世もあられぬ思ひが致します』

『ごうもお前さまの御親切、假令死んでも忘れませぬぞや。併しながら私はかうして結構な疊の上に坐り、暖かい火鉢の前に手をあぶりもつて養生をさして戴いてゐるが、李助さまは草の上に横たはつてムるのだから、何うしても私の心が治まりませぬ。何卒初稚さま珍彦さまに言ひつけて李助さまをこゝへ擔いで來て下さいな』

『左樣でムいますな。私が何程お勸め致しましても、中々容易に歸らうこは致しませぬ。ヤツパリ、スマートが怖いこみえます』

『李助さまは決して犬が怖いのではない、犬がお嫌ひなのだよ』

『怖いものは、つひ嫌ひになるものですからなア、併しお母さまの仰せに從ひ、これから珍彦さまに賴んで來ませう』

『あゝ何卒さうして下さい。夫婦枕を並べて養生をさして頂けば、こんな結構な事はありませぬわ』

『それなら、頑固な父でムいますけれど、娘の私が行つても聞きませぬから、珍彦さまに御願申して、此處へ歸つて來るやうにして貰ひませう。さうすれば私が御兩親の眞中にすわつて、御介抱を申上げますわねえ。夜分に寢る時は、お二人さまの中に狹まつて川こいふ字に寢ませうね。併しお母アさま、私が此處を出て行きますこお一人になりますが、ご

う致しませうか』

『さうだなア、誰か呼んで貰ひたいものだ』

『へー、何ぞ御用でムいますか』

こイルは初稚姫の顏がみたさに、呼びもせぬ先に、慌てて襖をスッと開き、次の間からニュッと首をつき出した。

『アレまア、イルさま、私、餘り突然なので、ビックリしたのよ』

『ハイ、別にビックリ遊ばすには及ばぬぢやムいませぬか。目元涼しく鼻筋通り、口元の締つた軍人上りの此イルですもの。高姫さまのやうな、そんなボテ南瓜みたやうな、化物じみたお顏を御覽になるよりも、イルの顏を御覽になつた方が餘程御愉快でせう、エヘ、、、、』

『陀羅尼助を嘗めた後で三盃白をなめるこ、いゝかげんに調和の取れるものですからね』

『コレ、お前はイルぢやないか。わしの顏を化物こ言うたな、そして大事の大事の娘に、此親の許しも受けずに、若い者が言葉をかはすこいふ事があるものかいなア。未來の聖人が言はしやつただろ…男女七歳にして席を同じうせず…こかや、然るに何ぞや、呼びもせないのに、ヌッケリこ若い者の居間へやつて來るこは、何か之には譯がなくてはならぬ。お前は大方初稚にスキートハートしてゐるのだろ。李助さまや私が病氣だこ思つて、娘に無体な事でも言はうものなら、承知しませぬぞや』

『メッソーな、誰が左樣な事考へて居りますもの。そんな下劣な人格者だこ思つて貰ひましては、エヘ、、、聊か此イルも迷惑千萬でムいますよ。實の所は、イク、サール、ハル、テルの奴、餘り剛情な婆アさまだから構うてやるな、放つこけ〳〵こ云つて、廊下を

走つて表へ行つて了ひました。それにも拘らず、拙者は貴女のお目が不自由なこ存じ次の間に控へて、御用があらば早速の間に合ふやうこ、此處に行儀よく控へて居つたのです。お目が見えぬのでお疑ひも無理こは申しませぬが、さう安い人間こ見られちや、イルの男前が下りますからなア』

『ごないでも理窟はつくものだ。口こいふものは調法なものだから、鷺を烏こ、烏を鷺こ言ひくるめるのは現代人の特色だ。お前さまのいふ事を强ち否定するのではないけれこ、マア十分の一位認めておきませうかな』

『認めるこ仰有つても、そんな目で分りますかな』

『イルさま、お母アさまは御病氣なのだから、何卒揶揄つて、お氣を揉ませないやうにして下さいねえ』

『ハイ、承知致しました。外ならぬ貴女のお言葉でございますから、一も二もなく服從致します。併しながら初稚姫樣、貴女本當に此高姫さまを、お母アさまこ思つてムるのですか』

『さうですこも、父の世話をして下さる高姫さまだもの、お母アさまに間違ひありませぬワ』

『ヘーエッ、何こマア氣のよいお方ですな。ヤッパリ、姿のいゝ人は心まで美しいかな。ヤもう實に感心致しました。私もこれから貴女の眞心に倣ひまして、ごつかで親を搜して、孝行してみたいものでございます。そして天下一の孝行者こ名を揚げたいものでございます』

『貴方は孝行を世間に知られたいこ思ひますか、それでは眞の孝ぢやありますまい。自己

を廣告する爲の手段でせう。要するに自己愛で、僞善者の好んで行ふべき手段でムいますよ。眞の孝行は決して人に知らるゝ事を望むものぢやありませぬ。本當に心の底からこもつた情愛でなければ、到底行へるものぢやムいませぬ』

『成程、イヤもうズンと合點が參りました。併し初稚姫樣、貴女は杢助樣に對する場合と高姫樣に對する場合とは、愛の情動に於て幾分かの相違があるでせうなァ』

『さうでムいます。何程高姫樣を本當のお母ァ樣だと思つても、ヤッパリ肉身の父に對する時の方が、何とはなしに愛情が深い樣な心持が致します』

『成程、貴女は正直なお方だ。世間の奴は自分の親より義理の親が大切だと、心にもない詐りをいひ、又世間の繼母は、義理の子だから吾子よりも大切にしなくてはならぬ、何だか知らぬが此子は自分の生んだ子よりも可愛て仕方がないなどと、人前で言ひながら、蔭へまはつて、抓つたり叩いたり虐待するものですが、貴女は實に天眞爛漫虚僞もなく一點の陰影もなき水晶玉の大聖人でムいます。私も今日まで隨分澤山の人につき合つて來ましたが、貴女のやうな方は、未だ一度も會つたことはムいませぬ。本當に神樣でムいますなァ』

と切りに感歎の聲を漏らしてゐる。

『イルさま、お母さまが大變お急きになつてゐるのだから、御心の休まるやうに、早くお父さまを呼んで來て下さいませ。珍彦さまにお賴み申せば、キッと其樣に取計らつて下さるでせう』

イルは、

『ハイ承知致しました』

と表へ騙け出した。

『コレ初稚さまや、何だかガサ〳〵と騒がしい音がするぢやありませぬか、誰か又貴女の美貌に心をころかし、悪性男がガサ〳〵と、書這にでも來てゐるのぢやあるまいかな。偉う不思議な音が致しますぞや』

『別に何も居りませぬが、大方お母さまのお頭が痛むので、さうお感じ遊ばすのでせう』

『あゝさう聞けばさうかも知れませぬ。何分頭を金槌でこつかれる程痛く感ずるのだからなア』

『お母さま、少し按摩をさして戴きませうか』

『イヤごうぞお構ひ下さいますな。何と云つても、血肉を分けた親の方が、愛情の程度が違ふさうですからなア』

と意地悪いことを姑流にほざき出した。

『餘り正直な事を申しまして、お氣を揉ませましたねえ。併し此初稚は、決して薄情な女でムいませぬから、さう仰有らずに按摩をさして下さいませな』

高姫は一寸すねたやうな口吻で、躰の自由も利かぬ癖に、ろくに舌もまはらない口から、

『ハイ、有難う、何れ又お頼み申します。まだお前さまに撫でて貰ふ所まで毫碌はしてゐないのだから、御緣があつたら頼みますワ。イ、ヒ、ヒ、ヒ』

『お母アさま、ごうぞ立腹して下さいますなや。何分年が行かないものですから、お氣にさはる事を申しまして…ごうぞ神直日大直日に見直し聞直し下さいませ』

『かくしても隠されぬのは心の色、言靈にチヤンと現はれて居りますぞや。あゝあゝ、ヤツパリ自分の腹を痛めた子でなうては氣が術無うて、お世話になる譯には行かないワ、虚

偽こ阿諛諂佞の流行する世の中だから、何程キレイなシャツ面をして居つても、心は豺狼に等しき人物ばかりだ」

こ妙に當てこすり、燒糞になり、惡垂口を叩き始めた。初稚姫は眞心より高姫の境遇を憐れみ何こかして靈肉共に完全に助けてやりたいものこ思ふより外に何もなかつたのである。そして病氣中は成るべく氣を揉ませないやう、腹を立てさせないやう、能ふ限りの慰安を與へたいものこ眞心に念じてゐたのである。されご根性のひがみ切つた高姫は、初稚姫の親切を汲み取る事は出來なかつた。初稚姫はイルに質問された時、高姫の喜ぶ樣に言葉を飾つて、一時なりこも、安心させたいこ、瞬間に心に閃いたけれごも、見えすいた嘘を云ふここは到底初稚姫には出來なかつた。苟くも宣傳使たるものが、心にもなき飾り言葉を用ふる事は出來ない。それ故正直に愛の程度に關し、少しばかり差等のある事を言つて聞かしたのが、無理解な高姫に恨まるゝ種こなつたのは是非もない事である。それだこ云つて、初稚姫も高姫を改心させる爲には其時相應の方便を使つて居たここは前記の物語によつても散見する所である。併し教義を說く時に於ては、初稚姫は儼然こして一歩も假借せないのである。すべて眞理こいふものは磐石の如く鐵棒の如く、屈曲自在ならしむるを得ざるが故である。もし宣傳使にして眞理迄も曲げて方便を亂用せむか、忽ち靈界及び現界の秩序は茲に紊亂し、神の神格を破壞する事を恐るゝが故である。あゝ惟神靈幸倍坐世。

（大正一二・一・二一　舊一一・一二・五　松村眞澄錄）

瑞月

言問はむ人さへもなき吾身には
窓下の讀者頼りなりけり
ひむがしの空を眺めて思ふかな
生日足日の吉き日あれよと
わが思ふ心の一つ通ひなば
九十九の峯も安く越ゆべし

第三篇　神意と人情

第一〇章　据置貯金（一三〇四）

祠の森には誰云ふとなく獅子、虎兩性の怪物が現はれ、人間に化けてゐる。その人間が祠の森の主管者だから、ウッカリ詣らうものなら喰はれて了ふと云ふ評判がパッと立つた。それ故氣の弱い連中は忽ち恐怖心に驅られて、こゝ二三日は誰も寄りつかなかつた。受付も事務室も極めて閑散である。只相變らず忙しいのは珍彦の神司のみである。珍彦は至誠神に仕へ、參拜者の有無に拘はらず、朝と晩とのお給仕を忠實に行つてゐる。イル、イク、サール、ハル、テルの五人は受付も事務室もほつたらかしにして、瓢と鰐なごを携へ、祠の森の最も風景佳き日當りのよい場所を選んで、頻りに酒を飲み始めた。

イク『オイ、御連中、何とまア祠の森も淋しくなつたぢやないか。エー、杢助さまが怪我をし

たとか云つて踪跡をくらまし、あの悪たれ婆さまの義理天上さまは杉の木へ天上して顚倒し、腰骨をしたゝか打ち、梟鳥の奴に兩眼をこつかれて顏面膨れ上り、丸でお化の樣になつて了つたぢやないか。あんまり嫌らしくなつて此神聖なお館も妖怪窟の樣な心持になつて來て、ジックリとして居られないぢやないか。酒でも飲んで元氣をつけなくちゃアやりきれないからな。おいイル、貴樣は義理天上さまのお世話をして居たぢやないか。隨分氣分が惡かつただらうな』

『何、そんな事に屁古垂れるイルさまぢやないわ。世の中は善惡相混じ美醜互に相交はるとこ云ふからな。一方には醜の醜、惡の惡なる義理天上さまの生宮の顏を見ながら、又一方には善の善、美の美なる天女のやうな初稚姫樣の紅顏麗容を拜してゐるのだから、相當に調和がとれるよ。美しいものばかり見てゐるこ、何時の間にか瞳孔の奴、增長しやがつて美しいものも美しうない樣になるものだが、何こ云つても極端な妖怪的醜面こ又極端な美蓉の顏月の眉、雪の肌、日月の眼、花の姿の初稚姫樣を見返つた時には其反動力こでも云はうか、其美は益々美に見え善は益々善こ映ずるのだ。それだから辛抱が出來たものだよ。いや結句辛抱ごころか、得も云はれぬ歡喜悅樂の氣分が漂ふのだ。イッヒ、、、、』

サール『おい、イル、それ程高姫さまの側が結構なら、何故朝から晩までくつついてゐないのだ。俺等の樣な醜面の處へ來て、口賤しい酒を喰はなくても、初稚姫樣の顏を見て恍惚こして心魂を蕩かし、醉うてゐたら宜いぢやないか』

『それもさうぢやが、初稚姫樣が「あたえ、一人でお世話を致しますから、イルさまは何卒休んで頂戴ね、又御用が厶りましたらお願ひ致しますから」こ、それは〳〵同情のこもつた此イルさまに……へ、、、、、一寸細い目を向けて優しい聲で仰有るのだもの、なん

ぼ頑固の俺だこて、君命もだし難く退却仕ると云ふことになつて、暫らく差控へてゐるのだ』

テル『ハ、、、、、馬鹿だな。本當に貴樣はお目出度い奴だよ。態よい辭令で肱鐵をかまされよつたのだ。貴樣の面を水鏡で一寸見て見よ、薩張顏の詰がぬけて了つてるぢやないか』

『ナーニ吐しやがるのだい。唐變木の貴樣等に分つて堪るものかい。初稚姫樣と俺との關係を貴樣知つてるのか。以心傳心、不言不語の間に於て萬世不易の愛的連鎖が結ばれてあるのだ。眞に濟みませぬな、エッヘ、、、、、、エー、涎の奴、イルさまの許可も無くして勝手氣儘に出ると云ふ事があるかい。何程俺がデレルと云うても、貴樣までが勝手にデレルとはチット越權だぞ。ウッフ、、、、』

と云ひながら牛の樣な粘液性に富んだ細い涎を手繰つてゐる。

テル『ハ、、、、、夢でも見てゐやがつたな。貴樣と姫樣との關係と云ふのは、只主と僕との關係だ。到底夫婦なんぞと、そんな事は柄にないわ』

イル『實の所は、初稚姫樣の美貌を幻になつて眺めてゐたものだから、義理天上さまの命令も耳に這入らず、ボカンとして居つた所を、高姫の奴目も見えない癖に、ボカンとやりやがつたのだ』

『愈〻三段目になつて來たな。さア一杯グッと飲んで、正念場を聞かして貰はうかい』

『酒の一杯や二杯では、神祕の鍵は渡す事は出來ないわ。此上話して聞かした處で、下根のお前等、所謂八衢人間には到底解し得ないから、まア云はぬが花として筐底深く秘めて置かう。開けて口惜しき玉手箱で無くて、ぶちあけて嬉しい玉手箱、折角握つた運命の鍵を貴樣等に占領されちやア、折角の苦心が水泡に歸するからな』

『おい、そんな出し惜しみをするものぢやない。其先の一寸小意氣な所を窺かしてくれないかい。刀の鑑定人は、チット許り砥石でこいで窓をあけ、柄元の匂ひを見れば、直に其名刀たり或は鈍刀たる事を知る如く、此テルさんは名の如く、心の底までよくテルさまだからな』

『實の所は、其先はあまりで云ふに忍びないのだ』

『忍びないこは何だ、ヤツパリやり損ねたのだな。玉茸を採り損つて梟の宵企みに目玉をこつかれた口だらう。ウフ、、、、』

『秘密にして臭れたら言つてやるが、お前等四人は一生涯他言はせぬこ云ふ誓ひをするかさうすれば一部分位はお祝に表示してやらぬ事もない』

四人聲を揃へて、

『よし誓つた。誓つた以上は大丈夫だからね』

『それなら云つてやらう。初稚姫さまが、それは〳〵何こも知れぬ情緒のこもつたお聲で柔かい細いお手々を出して「これイルさまえ、お前もお母さまのお世話をして下さるのでさぞお疲れでせう。何卒コーヒなつこ一杯お飲り下さいませ」……へ、、、、なーんて仰有つて、それは〳〵情のこもつた笑を湛へて注いで下さるのだ。それから頭腦鋭敏の某チャーンこ相手方の心の底まで見てこり、例の軍隊式で身体をキチンこ整理し、コーヒーを左手に一寸持ち、貴樣等が酒を飲む樣なしだらない事はなさらないな。第一姿勢を正しうし、氣を付け、「一、二、三」こ斯う空中に角度を描いて、わが口中へ徐に注入した。さア、さうするこ流石の初稚姫さまも堪へきれない樣な笑を洩して「ホ、、、、」こ鶯のさね渡りの樣な美聲妙音を放つて笑ひ遊ばしたのだ。さうするこ一方に控へて居る

義理天上の怪物奴、目が見えないものだから初稚姫様に喰つてかゝり「これ初稚、お前は之程親が苦しんでゐるのに、何面白さうに笑ふのだい。小氣味がよいのかい」等と意地苦根の悪い、あの優しいお姫さまに毒ついてゐるのだ。憎いの何のと、此時こそは愛人の爲に敵を討つてお目にかけむと奮然として立上り、高姫の横つ面目がけて骨も挫けよと許り「ウーン」と叩いたと思へば火鉢の角だつた、アハ、、、。よく〳〵見れば指から血が滲んでゐる。そこで「痛い」と云はむとせしが待て暫しだ。それはそれ、初稚姫様が監視して仏るだらう。千軍萬馬の中を命を的に勇往邁進し、砲煙弾雨を物ともしない軍人の某マサカ弱音を吹く譯にも行かず、痛さうな顔も出來ないのだから隨分我慢したね。さうすると、又もや初稚姫様が梅花の唇を開いて、鶯でも囀つてゐるやうに「ホ、、、、」と笑ひ聲をお洩し遊ばしたのだ。そこで此イルさまが「これはしたり、初稚姫殿」とやつたね」

テル『うーん面白いね。談益々佳境に入りけりだ。謹聽々々』

『さうすると初稚姫様が仰有るのに「あのまあイルさまの勇壯なお顔、口をへの字に結び眉間に迄皺を寄せて仏るお姿は、ビリケンの化相した山門の仁王さま見た様だわ」と仰有るのだ、エヘ、、、、。こゝに初めて某のヒーロー豪傑たる眞相を認められたと思つた時の嬉しさ、勇ましさ、イヤ早形容すべき言語もない位だつた』

サール『馬鹿、貴様、馬鹿にしられ居つてそれが嬉しいのか。戀に恍けた奴の目には、何でもかんでも愛に映ずるのだから堪らぬのだ。本富に此奴は罪玉を落して來よつたのだよ』

『こりや、サール、默つて聞かう。聽講者の妨害となるのを知らぬか。あまり騒擾致すと會堂外へ退去を命ずるぞ』

『へ、、、、、あーあ、あーあ、化物屋敷ぢやないが、アークビが出るわい』

テル『おい、イル公、サールなどに構はずドシ〳〵と長口舌を運轉さしてくれ。機關の油がきれたら又このアルコールをグッと注してやるからな』

『竹林の七賢人でなくて、森林の四賢一愚人がこゝに集まつて林間酒を暖めながら、田原峠の實戰の狀況を實地に臨んだ其勇士から聞くのだから、隨分勇壯なものだぞ。謹んで聞かないと、再び斯樣な面白き趣味津々たるローマンスは一生涯聞く事は出來ないぞ』

『うん、さうだろ〳〵。之からが正念場だ』

と捻鉢卷をしながら肱を張り、自分がやつた樣な氣で二足三足前へニジリ寄り、咬み犬の樣な顏をしてイルの顏をグッと見上げてゐる。イルは演說口調になつて、四邊の木の幹に片手を支へ、右の手を腰の邊りに置き、稍反身になつて喋々と虛實交々取りまぜて、講談師氣分で喋り始めた。

『扨て、前席に引續きまして御靜聽を煩はしまする。愈祠の森、高姫の段、三五教其人ありと聞えたるイルの勇將に、一方は古今無双のナイス、初稚姫との面白き物語でムります。そこへ勇猛なる義犬スマートをあしらつた物語でムりますれば、益々佳境に入り、お膳の宿替は申すに及ばず、翠玉の洋行致さない樣、十二分の御汗意を拂はれむ事を希望する次第であります』

ハル『おい、そんな長口上は如何でもいゝわ。早く本問題に移らないか』

『お客樣の仰せ、御尤もには候へど、今申したのは今夕の添物と致しまして、愈本問題に差しかゝりまする』

テル『おい、最前の樣に坐つて酒を飲みながらやつてくれないか。何だか學術講演會へ出席し

てる樣な氣がして、酒を飲んでる氣分がせないわ』

『御註文とあれば仰せに從ひ、それでは一寸天降りを致し、光を和らげ塵に同はつて下賤の人物と共に兄弟の如く、朋友の如く、打解けて御相談を致しませう。ハ、、、、』

と云ひながらドスンと腰を卸した拍子に、細い木の角杭の削ぎ口が槍の樣に尖つて居る其上に尻を下ろしたのだから堪らない。忽ちブスッと肛門に突入し、恰も粉ひき臼の上臼の樣になつて了つた。

『アイタ、、、然し丸いものと云ふものは誰でも狙ふものと見えるわい。木の株迄が俺の尻を狙つて居やがる。何程株が流行る世の中でも、此株ばつかりは御免だ。然し節季になつて尻拭ひが出來ぬと困るから、今の内に儉約して此處にチヤンと据置貯金だ。イヒ、、、、』

と少し許り肛門を破り血をたらしながら、ズブ六に醉うて居るので、そんな事に頓着なく滔々として辯じ始めた。

『扨て、初稚姫樣のお顏が目にちらつき、日が暮れても、寢ても起きても、雪隱の中にでも俺の目の前に現はれるのだ。何とまアよく初稚姫さまも惚れたものだな。何處に行つてもついて來てゐる。据膳喰はぬは男でないと思ひ、轟く胸をグッと抑へ、勇氣を鼓してその優しい手をグッと握つた途端に「ウー、ワン〳〵」と云つて俺の耳たぼに嚙ぶりつき、これ、此通り傷をさせよつたのだ』

テル『何と顏にも似合はぬ恐ろしい女だな』

『何、姫樣だと思つたら猛犬の手を力一杯握つたものだから、畜生吃驚して喰ひつきよつたのだ、アハ、、、、』

サール『何だ。大方、そこらが落ちだと思つてゐたのだ。貴樣は一靈四魂の活動が不完全だから、そんな頓馬な事ばかりやりよるのだ。チツと學の研究でもしたら如何だい、男爵樣が氣をつけるぞや』

『ヘン、男爵、馬鹿にするない。貴樣は首陀の生れぢやないか』

『男が酌をして飲むのが男爵だ。私が勝手に酌をして飲むのが私爵だ。小酌な事を申すと承知致さぬぞ』

『俺は酒を飲んで口から嘔吐と一緒に吐いたから吐く酌樣だ。吐く酌として餘裕ある一丈七尺の男子だからな』

『ヘン、一丈七尺なんて七尺にも足らぬ小男奴、偉さうに云ふない』

『八尺と九尺とよせて八九尺だ。一丈七尺と云つたのが何處が算盤が違ふのだ。何と粗雜な頭腦の持主だな。一靈四魂が如何だのかうだのと、偉さうに云ふない。それ程偉さうに云ふのなら、一つ解釋して見よ』

『貴樣の樣な木耳耳には聞かしてやるのは惜しけれど、俺が無學者と思はれちや片腹痛い云ひがかり上、男子として說明の勞を與へないのも、學者の估券を傷付くる事になるから一つはりこんで敎訓してやらう。エヘン、抑々一靈四魂と云ふのは、直靈、荒魂、奇魂、幸魂、和魂を云ふのだ。さうして荒魂は勇なり、幸魂は愛なり、奇魂は智なり、和魂は親なり、分つたか、隨分よく學理に明るいものだらう』

『勇とは何だ。勇の說明をせぬかい』

『マ男を卽ち勇者と云ふのだ。どうだ、分つたか。それから親の講釋だ。親と云ふ事は親と云ふ字だ。辛い目を八度見せるのを親と云ふのだ。それから愛だ。どんな事でも有利な

ものであつたならば喉を鳴らして受ける心、之を愛と云ふ。ヘン、又日々貴様のやうに口で失策する奴を智と云ふのだ。十目一様に見るのを直靈の直といふのだ。何と云つてもサールさまだらう。俺の知識には、誰一人天下に手をサールものがないのだから、サールさまと申すのだ、エヘン』

テル『成程、妙々、如何にもよく徹底した。文字と云ふものは感心な意味を含んだものだね』

斯く話す折しも楓は森の彼方より、

『イルさま、皆さま、早う歸つて下さい』

とありきりの聲を出して呼ばはつた。

五人は取る物も取り敢へず、バタ〳〵と事務所をさして歸り行く。

（大正一二・一・二一　舊一一・一二・五　北村隆光錄）

第一一章　鸚鵡返（一三〇五）

祠の森の神館に　現はれ來りし杢助の
其正体は月の國　大雲山に蟠まる
八岐大蛇の片腕と　妖魅の世界に名も高き
獅子と虎との中性を　備へし怪しの動物ぞ
妖幻坊と謳はれて　彼方此方に出沒し
神出鬼沒の妖術を　使ひて世人をなやませつ
地上の世界を魔界とし　所有善を亡ぼして
邪惡と虚僞の世にせむと　狂ひ廻るぞ由々しけれ

三五教の宣傳使
凝らして仕へまつりたる
尊き神の御社を
惡魔に御魂を奪はれし
茲に夫婦となりすまし
忽ち來る三五の
初稚姫の靈光と
恐れて逃げ出すその途端
其正体を看破りて
幾層倍の巨体をば
玉國別が丹精を
嚴の御靈や瑞御靈
蹂躙せむと出で來る
高姫司を誑かし
生地をかくして居たる折
道に名高き宣傳使
伴ひ來る猛犬に
神に仕ふるスマートが
忽ち勇氣を振り起し
有する曲津に取りついて

眉間のあたりを一嚙ぶり
傍へに鎬を削りつゝ
雲を霞と山の尾を
スマートは足を傷つけて
初稚姫の居間に入り
自分療治の巧妙さ
兇暴不敵の曲神と
戀ひ慕ひつゝひそ〳〵と
先づ第一に目上の瘤と
靜子の方を毒殺し
森を流るゝ谷水の
妖魅は忽ち驚愕し
指して一先づ逃げて行く
チガ〳〵しながら立歸り
暫し痛手を舐めながら
高姫司は杢助を
知らぬ悲しさ吾夫と
よからぬ事を計劃し
心にかゝる珍彦や
楓の姫を吾子ぞと

傷りすまして聖場に
齋苑の館にましませる
世界救治の神策を
嬶めて囁く恐ろしさ。

○

楓の姫の枕邊に
言靈別の化身なる
さしも雄々しきスマートを
危難を救ひ與へよと
與へて雲に身を隱し
いや永久に陣を取り
神素盞嗚大神の
妨害せむと首をば
現はれ給ひしエンゼルは
文珠菩薩と嚴めしく
伴ひ來り兩親の
百毒解散の神丹を
何處ともなく出でましぬ

楓はハッと目を醒まし
夢に受けたる靈藥を
妖幻坊の李助が
一先づこゝを追ひ出し
李助司の瘡傷を
梢に生えし玉茸を
人目をしのび梯子を
重い體をたわ〳〵と
やつと手ゞかけ蜘蛛の巣に
梢を探し居たりしが
吾手の拳を調ぶれば
握り居たるぞ不思議なれ
意思に從ひスマートを
やつと安心する間なく
癒さむために大杉の
密に取らむと高姫は
大木の幹に立てかけて
さしもに高き一の枝
引つかゝりつゝ右左
忽ち梟の兩眼を